

大阪府内地域連携プラットフォーム
2025（令和 7）年度 新入生対象 薬物に関する意識調査
（共同 IR 実施報告）

1. 調査の目的	1
2. 調査の概要	1
3. 調査の結果	8
4. 調査結果を踏まえた今後の方向性について	51

2025(令和 7)年 9 月

大阪府内地域連携プラットフォーム

1. 調査の目的

近年、スマートフォンの急速な普及に伴い、インターネットやソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を通じて大学生が大麻などの違法薬物に接しやすい状況が生じている。

大学コンソーシアム大阪では、各地で大学生の違法薬物所持や乱用による逮捕者が相次ぐ状況を重く受け止め、大学の使命として学生に健康で充実した大学生活を保障するとともに、安全で安心な社会の実現のために、複数大学が連携して社会的意義のある啓発活動に取り組むため、2020（令和 2）年 5 月に開催した総会において会員大学の新入生を対象とした薬物乱用防止に関するアンケート調査を実施することを決定し、今回 5 回目の調査となる。

大学生の薬物に対する意識の実態把握はもとより、調査を通じて新しく大学生活を始める新生に薬物乱用防止の啓発を一層促進することを目的に本調査を実施する。

2. 調査の概要

(1) 調査対象者

令和 7 年度に大学コンソーシアム大阪会員大学（大阪府内地域連携プラットフォーム形成大学）に入学した学生

(2) 調査実施方法

- ①各大学において、新入生ガイダンス等で新入生に周知用チラシを配布、回答を指示
 - ②学生が各自パソコン、スマートフォン等にて、大学コンソーシアム大阪のホームページのアンケートフォームにアクセスし回答
- なお、関西大学は大学独自に調査を実施し、その集計結果を加えて計上している。
（但し、性別と質問 1、2 は除く。）

(3) 調査実施期間

令和 7 年 4 月 1 日（火）～5 月 9 日（金）

(4) 調査主体

特定非営利活動法人 大学コンソーシアム大阪

(5) 調査の内容

調査の内容は、全 24 問 28 項目で構成されている。今回の調査では、問 1、問 2、問 24 を新たに追加したことにより、設問番号が過年度の調査と一部異なっている。また、問 18 は従来の単一回答形式から複数回答形式に変更された。さらに、問 3 の設問文は「関心がありますか」から「危機感や不安を感じていますか」に、問 21（ア）は「入手可能することが可能だと思いますか」から「入手することが可能ですか」に、それぞれ修正されている。

性別に関する分析においては、「その他」と回答した者が少数であったため、数値は掲載しているが、分析上のコメントからは除外している。

また、自由記述欄において「その他」と分類された記載には、設問に対する直接的な回答ではない自由記述が含まれている。

質問 1 あなたは、お酒を飲みたいと思いますか。（1 つ選択）	
1	飲みたいと思う
2	飲みたいと思わない
3	わからない

質問 2 あなたは、煙草を吸いたいですか。（1 つ選択）	
1	吸いたと思う
2	吸いたと思わない
3	わからない

質問 3 あなたは、薬物乱用問題について危機感や不安を感じていますか。（1 つ選択）	
1	非常に感じている
2	ある程度感じている
3	どちらともいえない
4	あまり感じていない
5	ほとんど感じていない

質問 4 あなたは、以下の薬物の名前を知っていますか。（複数選択可）	
1	有機溶剤（シンナー、トルエンなど）
2	覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）
3	大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど）
4	コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）
5	あへん類（ヘロインなど）
6	LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）
7	MDMA（エクスタシーなど）
8	いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブなど）
9	大麻入り食品（大麻グミなど）
10	知っているものはない

【次の質問以降は質問 4 であげた薬物についてお聞きします。】	
質問 5 あなたは、これらの薬物についてどのような印象を持っていますか。（複数選択可）	
1	かっこいい
2	気持ち良くなれる気がする
3	ダイエットに効果がある
4	眠気覚ましに効果がある
5	1 回使うくらいであれば、心や体への害はない
6	心や体に害がある
7	犯罪に巻き込まれる
8	使ったり、持っていたりするのは悪いことだ
9	1 回でも使うと止められなくなる
10	人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ
11	特にない
12	わからない

質問6 あなたは、これらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、また、他人に譲渡したり、譲渡された場合、どうなと思いますか。（1つ選択）	
1	罰せられる
2	罰せられるものもある
3	1回くらいなら、罰せられることはない
4	罰せられることはない
5	わからない

質問7 あなたは、これらの薬物について学んだり聞いたりしたことがありましたか。（どちらかを選択）	
1	あった
2	なかった

質問8 あなたは、薬物を使った場合、以下のようにになることがあるのを知っていましたか。（複数選択可）	
1	現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある
2	わけもなく怯えたり（妄想気分）、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある
3	自分の行動に干渉する声が聞こえる（幻聴）ことがある
4	何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる
5	依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない
6	知らなかった

質問9 あなたは、これらの薬物について何から情報を得ましたか。（複数選択可）	
1	小学校の授業
2	中学校の授業
3	高校の授業
4	大学が配布しているリーフレット等
5	大学での啓発ビデオ
6	大学での講演会
7	友達、仲間、先輩、後輩
8	家族
9	ポスター、パンフレット
10	本、雑誌
11	新聞
12	テレビ
13	ラジオ
14	インターネット
15	SNS
16	その他

質問10 あなたは、これらの薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）をもっと知りたいですか。（1つ選択）	
1	知りたい
2	知りたいとは思わない
3	どちらでもない

質問 11 あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。（複数選択可）	
1	大学（講演会、ビデオ、リーフレット）
2	家庭
3	地域活動、自治体等の広報誌
4	図書館、公民館
5	保健所
6	警察
7	厚生労働省麻薬取締部
8	病院
9	インターネット
10	講演会、座談会
11	特になし
12	その他

質問 12 あなたは、これらの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思いますか。（複数選択可）	
1	薬物が簡単に手に入るようになっている
2	本や雑誌等に薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている
3	SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている
4	社会のルールを守ろうとする意識が薄れている
5	薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない
6	簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い
7	薬物の害について学ぶことが少ない
8	友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる
9	学校や家庭がおもしろくない
10	わからない
11	その他

質問 13 あなたは、これらの薬物を使うことについてどのように考えていますか。（1つ選択）	
1	どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない
2	1回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない
3	他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である
4	その他

質問 14 あなたは、これらの薬物が使用されているところを直接見たことがありますか。（テレビ、映画、インターネット、報道等で見たものは除きます）（どちらかを選択）	
1	ない
2	ある

質問 15 あなたは、これらの薬物を使用することや購入することを誘われたり、勧められたりすることが、これまでにありましたか。（1つ選択）	
1	誘われたり、勧められたことはない
2	購入を勧められたことがある
3	使用を誘われたことがある
4	無理やり使わされたことがある
5	わからない

質問 16 あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。（複数選択可）	
1	誘った相手が誰であろうと、断る
2	誘った相手によっては、断りきれないかもしれない
3	一回くらいであれば体に害がなさそうなので断らないかもしれない
4	好奇心や面白半分から断らないかもしれない
5	悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない
6	わからない
7	その他

質問 17（ア）あなたの周囲に、これらの薬物を所持したり、使用している（いた）人がいますか。（1つ選択）	
1	いない
2	いる（いた）
3	わからない

【質問 17（ア）で「2 いる（いた）」を選択した人だけお答えください】 質問 17（イ） どの薬物でしたか。（複数選択可）	
1	有機溶剤（シンナー、トルエンなど）
2	覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）
3	大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど）
4	コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）
5	あへん類（ヘロインなど）
6	LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）
7	MDMA（エクスタシーなど）
8	いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブなど）
9	大麻入り食品（大麻グミなど）
10	わからない

質問 18 あなたは、もし友人がこれらの薬物を使用していることを知った場合、どうしますか。（複数選択可）	
1	使用をやめるよう説得する
2	他の人（先生や友人など）に伝える
3	警察に通報する
4	医療機関や保健所等に連絡する
5	個人の自由であるので放っておく
6	わからない
7	その他

質問 19 あなたは、これらの薬物に関する相談窓口があることを知っていますか。（複数選択可）	
1	警察の相談窓口
2	行政機関の相談窓口（精神保健福祉センター等）
3	厚生労働省麻薬取締部の相談窓口
4	医療機関の相談窓口
5	民間の支援団体の相談窓口
6	知らない
7	その他

質問 20 あなたや、あなたのまわりの人がこれらの薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は何か。（複数選択可）	
1	薬物乱用による健康被害情報
2	薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報
3	国や地方公共団体の薬物乱用対策情報
4	医療機関や民間支援団体の取り組み情報
5	特になし
6	その他

質問 21（ア）あなたは、これらの薬物を入手することが可能ですか。（1 つ選択）	
1	不可能だ
2	かなり難しい
3	難しいが手に入る
4	手に入る

【質問 21（ア）で「3 難しいが手に入る、または、4 手に入る」を選択した人だけお答えください】	
質問 21（イ）入手可能と考えた理由は何ですか。（複数選択可）	
1	SNSやインターネットで探せば見つけることができるから
2	SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから
3	友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから
4	繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから
5	それ以外

【質問 21（イ）で「5 それ以外」を選択した人だけお答えください】
質問 21（ウ）それ以外に入手可能と考えた理由は何ですか。

質問 22 あなたは、医薬品医療機器等法により、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッドなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となる薬物になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

- | | |
|---|--------|
| 1 | 知っている |
| 2 | 知らなかった |

質問 23 あなたは、「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」が社会問題になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」とは、市販薬（かぜ薬、解熱剤・鎮痛剤・睡眠薬など）を定められた用法・用量以上に服用する（過剰摂取する）ことで、薬物への依存が高まるだけでなく、内臓機能障害や最悪の場合は心肺停止で死亡するケースもある、薬物乱用の一種です。

- | | |
|---|--------|
| 1 | 知っている |
| 2 | 知らなかった |

質問 24 2023 年 12 月に「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」が成立し、2024 年 12 月 12 日にその一部が施行されていますが、あなたはこの施行内容について知っていますか。（複数選択可）

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 | 医療目的以外で大麻を使用・摂取することが違法となった |
| 2 | 大麻の所持・譲受・譲渡・輸出入・製造に対する刑罰が厳罰化された |
| 3 | 知らなかった |

3. 調査の結果

(1) 回答者数

本調査には、会員大学のうち 33 大学の学生、計 15,231 名から回答があった。大学別の回答者は下表のとおりである。

図表 1 会員大学全体の回答者数と所属大学別回答者数

	回答者数	割合 (%)			
会員大学全体	15,231	100.00			
回答者所属大学	回答者数	割合 (%)	回答者所属大学	回答者数	割合 (%)
大阪大学	114	0.75	大阪体育大学	16	0.11
大阪教育大学	0	0.00	大阪電気通信大学	298	1.96
大阪公立大学	188	1.23	大阪人間科学大学	0	0.00
藍野大学	4	0.03	大阪保健医療大学	117	0.77
追手門学院大学	970	6.37	大手前大学	150	0.98
大阪青山大学	30	0.20	関西大学	6,893	45.26
大阪医科薬科大学	374	2.46	関西福祉科学大学	4	0.03
大阪大谷大学	102	0.67	近畿大学	2,188	14.37
大阪学院大学	251	1.65	四條畷学園大学	0	0.00
大阪観光大学	62	0.41	四天王寺大学	0	0.00
大阪経済大学	393	2.58	摂南大学	2,054	13.49
大阪経済法科大学	0	0.00	千里金蘭大学	2	0.01
大阪工業大学	64	0.42	相愛大学	37	0.24
大阪国際大学	56	0.37	宝塚大学	74	0.49
大阪産業大学	109	0.72	帝塚山学院大学	109	0.72
大阪樟蔭女子大学	0	0.00	梅花女子大学	45	0.30
大阪商業大学	7	0.05	羽衣国際大学	83	0.54
大阪女学院大学	121	0.79	阪南大学	0	0.00
大阪信愛学院大学	7	0.05	東大阪大学	0	0.00
大阪成蹊大学	7	0.05	桃山学院大学	153	1.00
大阪総合保育大学	0	0.00	森ノ宮医療大学	139	0.91
			無回答	10	0.07

※性別回答数内訳：男性 4,522 名、女性 3,482 名、その他 29 名、回答しない 305 名
計 8,338 名（関西大学調査分は除く）

※各選択肢の割合（％）は、小数点第 2 位以下を四捨五入しているため、合計が 100％にならない場合がある（以下の図表も同様）。

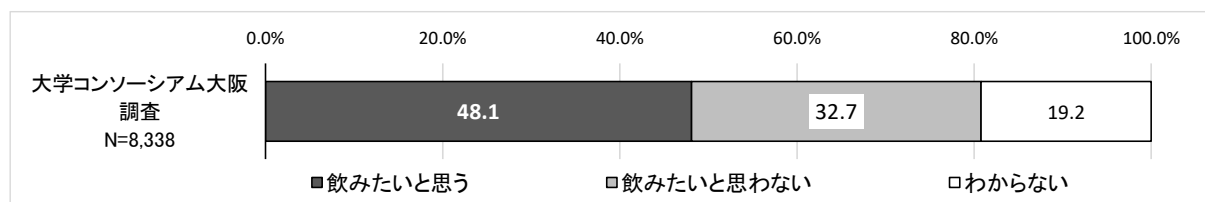
(2) 飲酒の志向

質問1 あなたは、お酒を飲みたいと思いますか。(1つ選択)

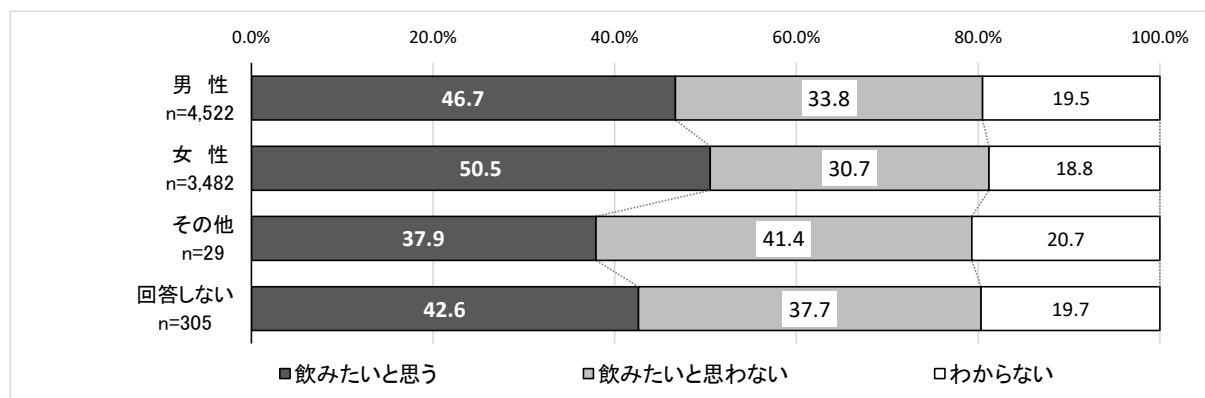
飲酒の志向については、「飲みたいと思う」が48.1%、「飲みたいと思わない」が32.7%、「わからない」が19.2%となっている。

性別にみると、「飲みたいと思う」の割合は、「女性」が50.5%と半数を超えている。

図表2 飲酒の志向



《性別比較》



	大学コンソーシアム大阪									
	調査		男性		女性		その他		回答しない	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	8,338	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0
飲みたいと思う	4,011	48.1	2,111	46.7	1,759	50.5	11	37.9	130	42.6
飲みたいと思わない	2,724	32.7	1,529	33.8	1,068	30.7	12	41.4	115	37.7
わからない	1,603	19.2	882	19.5	655	18.8	6	20.7	60	19.7

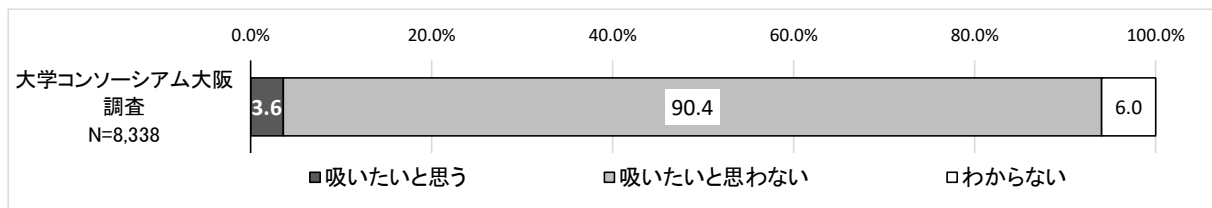
(3) 喫煙の志向

質問2 あなたは、煙草を吸いたいと思いますか。(1つ選択)

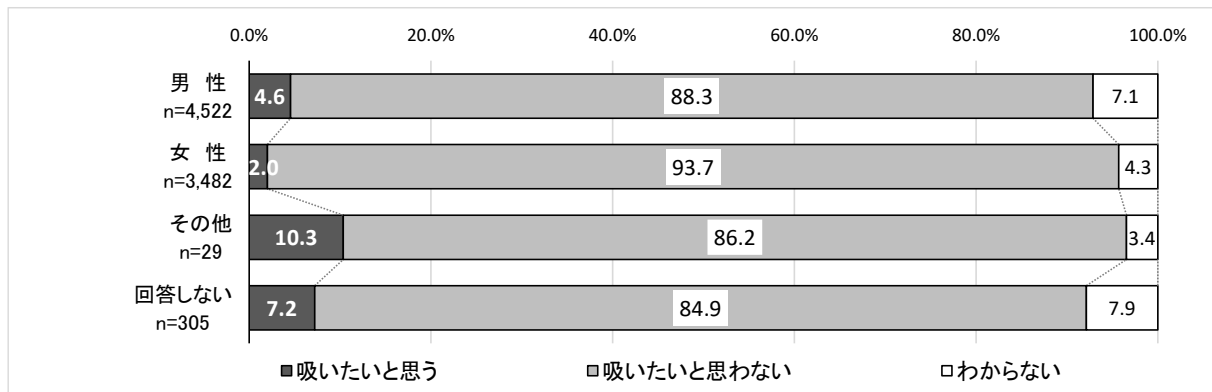
喫煙の志向については、90.4%が「吸いたくない」と回答しており、「吸いたと思う」が3.6%、「わからない」が6.0%となっている。

性別にみると、「吸いたくない」との回答割合は、「女性」が他に比べてやや高く、「男性」および性別を「回答しない」とした人の割合は、それぞれ8割台となっている。

図表 3 喫煙の志向



《性別比較》



	大学コンソーシアム大阪									
	調査		男性		女性		その他		回答しない	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	8,338	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0
吸いたいと思う	301	3.6	206	4.6	70	2.0	3	10.3	22	7.2
吸いたくないと思う	7,540	90.4	3,994	88.3	3,262	93.7	25	86.2	259	84.9
わからない	497	6.0	322	7.1	150	4.3	1	3.4	24	7.9

(4) 薬物乱用問題への危機感・不安感

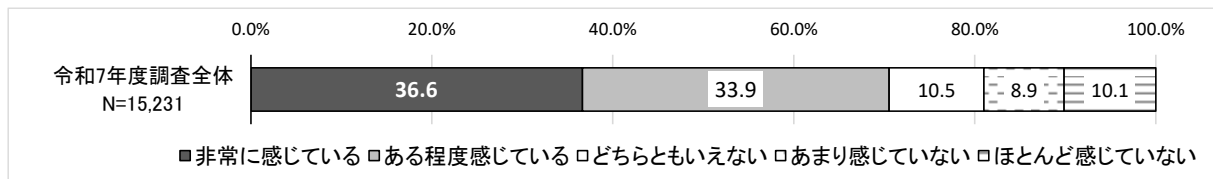
問 3 あなたは、薬物乱用問題について危機感や不安を感じていますか。(1つ選択)

薬物乱用問題への危機感・不安感については、「非常に感じている」が 36.6%、「ある程度感じている」が 33.9%で、7 割の人が危機感・不安感を感じている。「どちらともいえない」が 10.5%、「あまり感じていない」が 8.9%、「ほとんど感じていない」が 10.1%である。

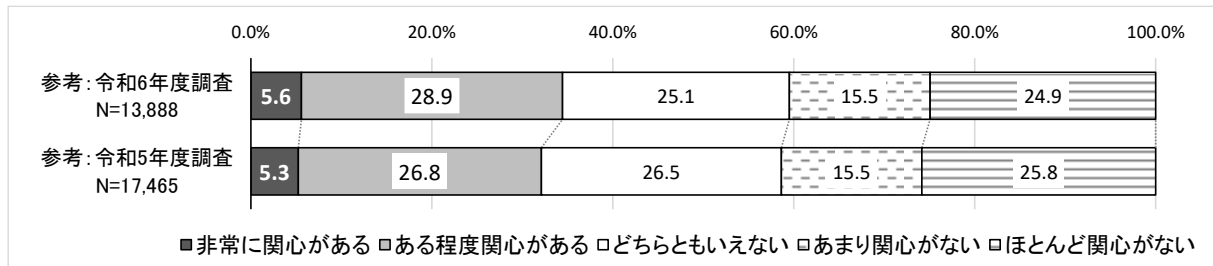
過去 2 年の調査では、「薬物乱用問題への関心」をたずねているが、関心度（「非常に関心がある」と「関心がある」の合計）が 3 割台であったことを踏まえると、危機感・不安感に関心度より大きくなっている。

性別にみると、危機感・不安感がある割合（「非常に感じている」と「ある程度感じている」の合計）は、「女性」が他に比べてやや高い。

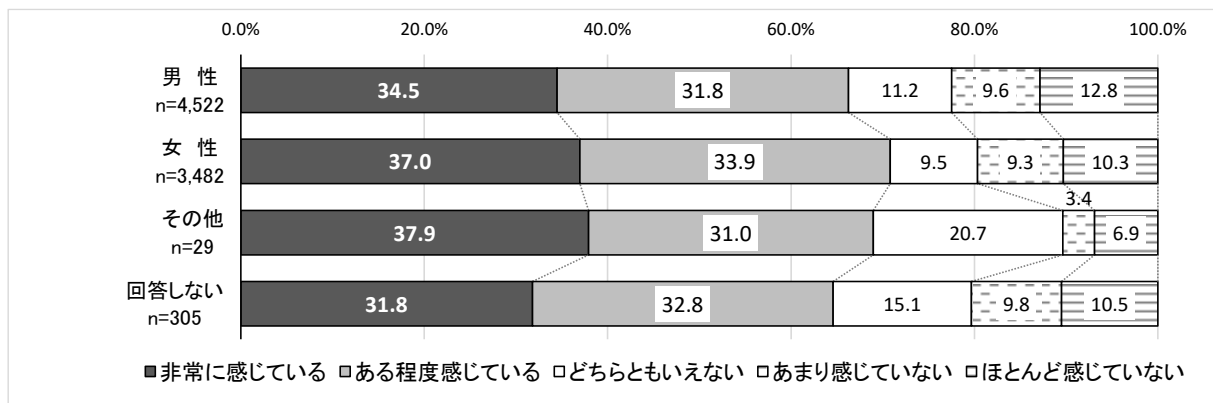
図表4 薬物乱用問題の危機感・不安感



《参考：過去2年の調査》



《性別比較》



	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								参考			
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		令和6年度調査		令和5年度調査	
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
非常に感じている	5,582	36.6	1,560	34.5	1,287	37.0	11	37.9	97	31.8	777	5.6	919	5.3
ある程度感じている	5,159	33.9	1,437	31.8	1,179	33.9	9	31.0	100	32.8	4,009	28.9	4,689	26.8
どちらともいえない	1,599	10.5	508	11.2	332	9.5	6	20.7	46	15.1	3,481	25.1	4,631	26.5
あまり感じていない	1,349	8.9	436	9.6	325	9.3	1	3.4	30	9.8	2,157	15.5	2,713	15.5
ほとんど感じていない	1,542	10.1	581	12.8	359	10.3	2	6.9	32	10.5	3,464	24.9	4,513	25.8

(5) 薬物名の認知状況

問4 あなたは、以下の薬物の名前を知っていますか。(複数選択可)

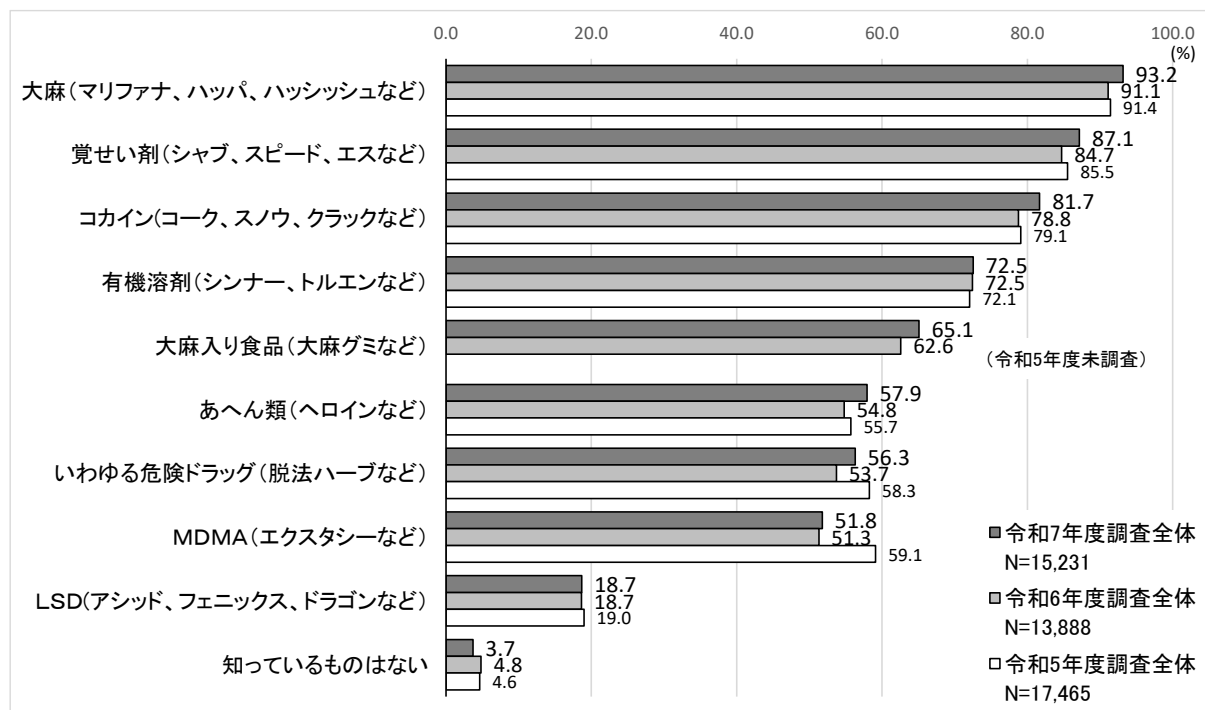
9種類の薬物を提示して、知っている名前をたずねたところ、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシュシュなど)」の回答割合が93.2%と最も高く、「覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)」が87.1%、「コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)」が81.7%、「有機溶剤(シンナー、トルエンなど)」が72.5%、「大麻入り食品(大麻グミなど)」が65.1%、「あへん類(ヘロインなど)」が57.9%、「いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブなど)」が56.3%、「MDMA(エクスタシーなど)」が51.8%となっている。「LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴン

など)」以外の 8 種の薬物については、認知度が 5 割以上と高い。なお、「知っているものはない」と回答した割合は 3.7%と最も低い。

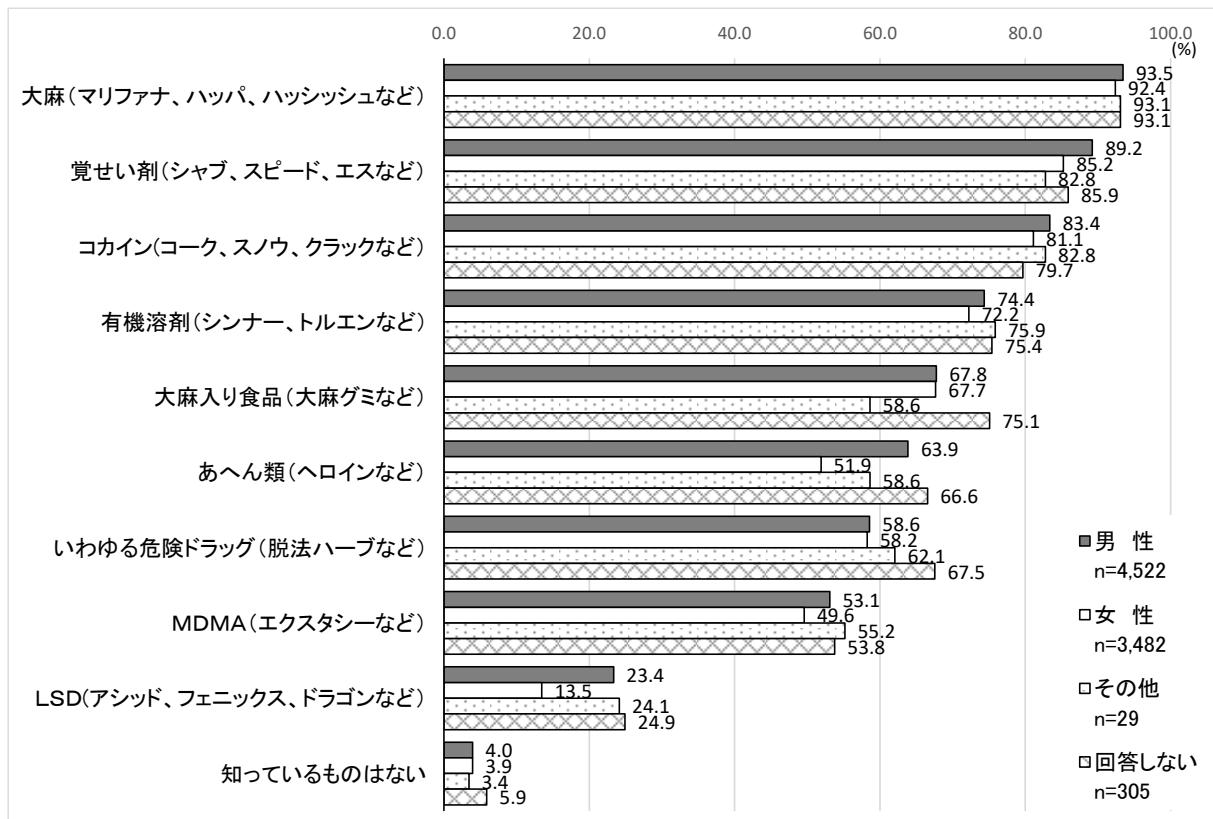
過去 2 年の調査と比較すると、認知度がやや高まっている薬物もみられる。

性別にみると、認知している薬物の傾向に差はないが、「女性」の認知度が他に比べて低い項目がある。

図表 5 知っている薬物の名前
 ≪3 か年調査比較≫



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査		令和5年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
有機溶剤(シンナー、トルエンなど)	11,048	72.5	3,363	74.4	2,515	72.2	22	75.9	230	75.4	10,062	72.5	12,586	72.1
覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)	13,273	87.1	4,035	89.2	2,968	85.2	24	82.8	262	85.9	11,768	84.7	14,937	85.5
大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)	14,190	93.2	4,226	93.5	3,217	92.4	27	93.1	284	93.1	12,657	91.1	15,967	91.4
コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)	12,442	81.7	3,770	83.4	2,824	81.1	24	82.8	243	79.7	10,942	78.8	13,812	79.1
あへん類(ヘロインなど)	8,825	57.9	2,888	63.9	1,807	51.9	17	58.6	203	66.6	7,610	54.8	9,734	55.7
LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)	2,845	18.7	1,056	23.4	469	13.5	7	24.1	76	24.9	2,592	18.7	3,322	19.0
MDMA(エクスタシーなど)	7,886	51.8	2,401	53.1	1,726	49.6	16	55.2	164	53.8	7,128	51.3	10,324	59.1
いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブなど)	8,577	56.3	2,649	58.6	2,028	58.2	18	62.1	206	67.5	7,462	53.7	10,177	58.3
大麻入り食品(大麻グミなど)	9,915	65.1	3,065	67.8	2,356	67.7	17	58.6	229	75.1	8,693	62.6	-	-
知っているものはない	565	3.7	179	4.0	137	3.9	1	3.4	18	5.9	672	4.8	811	4.6
累計	89,566		27,632		20,047		173		1,915		79,586		91,670	

(6) 薬物の印象

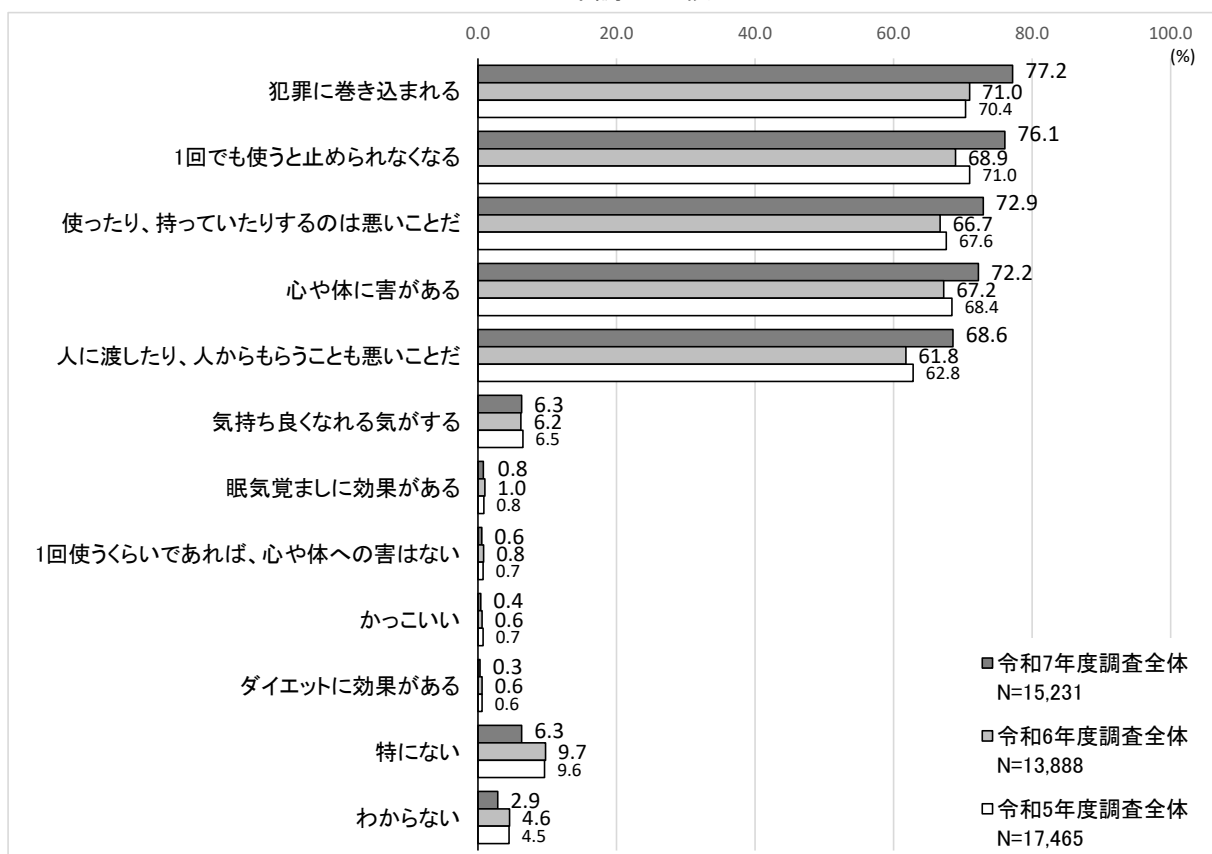
問5 あなたは、これらの（質問4であげた）薬物についてどのような印象を持っていますか。（複数選択可）

質問4で提示した薬物の印象について、77.2%が「犯罪に巻き込まれる」との印象をもっており、「1回でも使うと止められなくなる」が76.1%、「使ったり、持ったりするのは悪いことだ」が72.9%、「心や体に害がある」が72.2%、「人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ」が68.6%と、マイナスの印象が7割前後となっている。なお、過去2年の調査と比較すると、これらの割合が高くなっている。

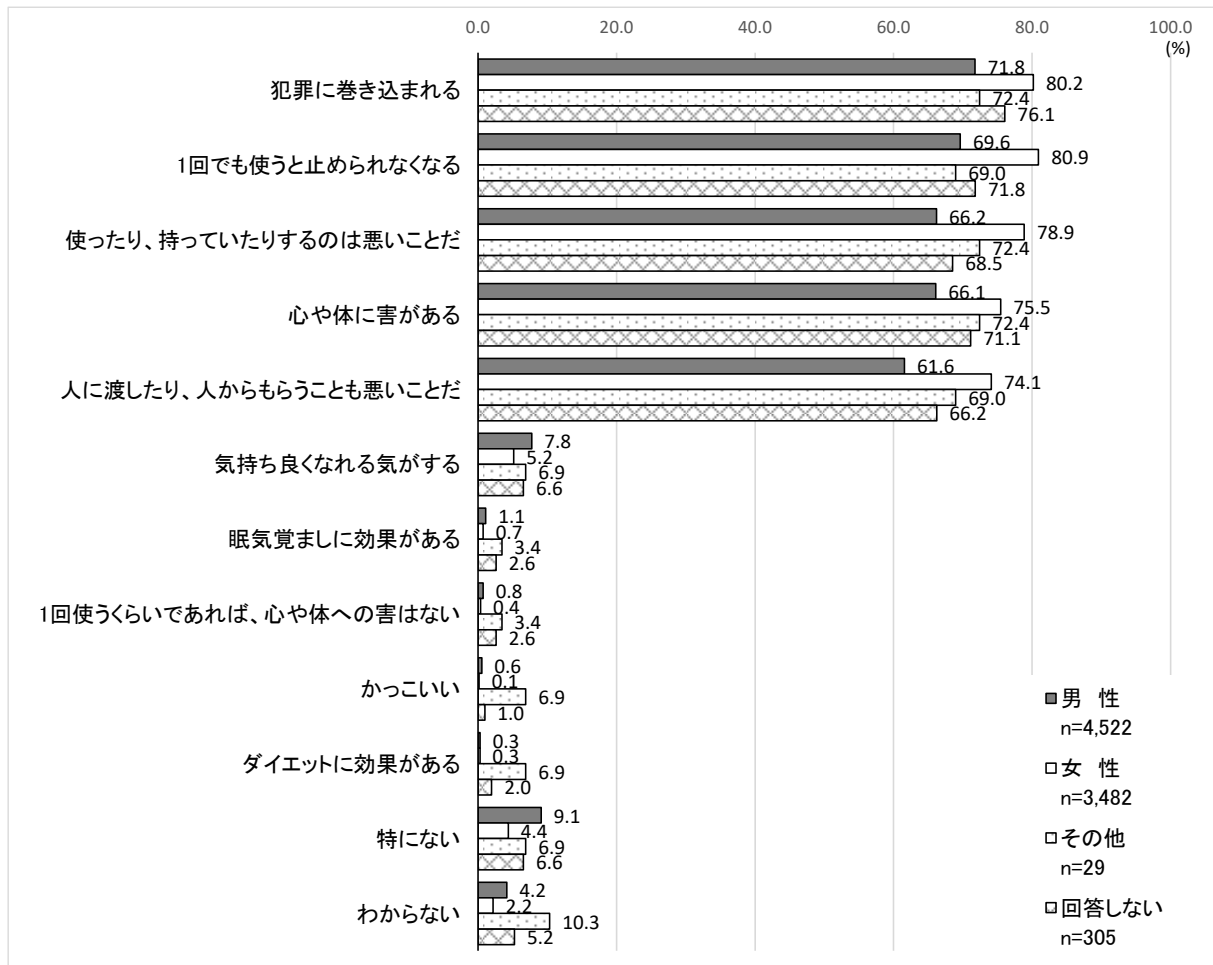
全体的に「気持ち良くなれる気がする」、「眠気覚ましに効果がある」、「1回使うくらいであれば、心や体への害はない」、「かっこいい」、「ダイエットに効果がある」といったプラスの印象を選択した割合は低いものの、過去2年の調査と同様に一定数が選択している。

性別にみると、「女性」は、他に比べてマイナスの印象の割合が高い。

図表6 薬物の印象
《3か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査		令和5年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
かつこいい	64	0.4	25	0.6	5	0.1	2	6.9	3	1.0	81	0.6	129	0.7
気持ち良くなれる気がする	958	6.3	351	7.8	180	5.2	2	6.9	20	6.6	862	6.2	1,132	6.5
ダイエットに効果がある	45	0.3	14	0.3	10	0.3	2	6.9	6	2.0	80	0.6	103	0.6
眠気覚ましに効果がある	119	0.8	50	1.1	26	0.7	1	3.4	8	2.6	138	1.0	147	0.8
1回使うくらいであれば、心や体への害はない	86	0.6	34	0.8	13	0.4	1	3.4	8	2.6	114	0.8	130	0.7
心や体に害がある	11,002	72.2	2,988	66.1	2,628	75.5	21	72.4	217	71.1	9,339	67.2	11,948	68.4
犯罪に巻き込まれる	11,758	77.2	3,245	71.8	2,792	80.2	21	72.4	232	76.1	9,857	71.0	12,293	70.4
使ったり、持っていたりするの悪いことだ	11,109	72.9	2,993	66.2	2,746	78.9	21	72.4	209	68.5	9,266	66.7	11,806	67.6
1回でも使うと止められなくなる	11,584	76.1	3,149	69.6	2,818	80.9	20	69.0	219	71.8	9,573	68.9	12,401	71.0
人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ	10,444	68.6	2,784	61.6	2,581	74.1	20	69.0	202	66.2	8,583	61.8	10,971	62.8
特にない	963	6.3	412	9.1	152	4.4	2	6.9	20	6.6	1,354	9.7	1,679	9.6
わからない	437	2.9	188	4.2	76	2.2	3	10.3	16	5.2	633	4.6	782	4.5
累計	58,569		16,233		14,027		116		1,160		49,880		63,521	

(7) 薬物の使用・所持・譲渡への処罰に関する認識

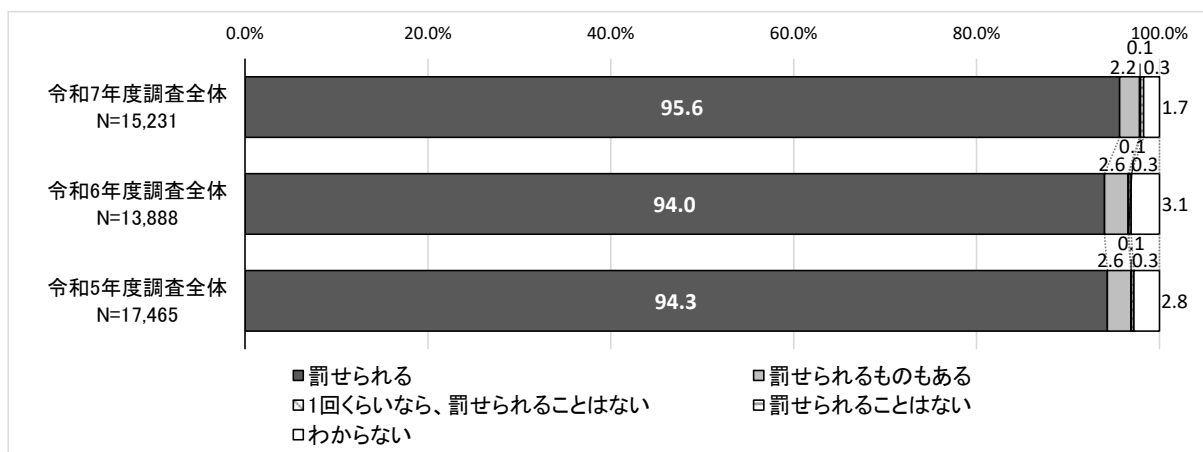
問6 あなたは、これらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、また他人に譲渡したり、譲渡された場合、どうだと思いますか。（1つ選択）

質問4で提示した薬物を使用したり、所持していたり、他人に譲渡したり、譲渡された場合どうなると思うかについては、95.6%が「罰せられる」と回答し、「罰せられるものもある」が2.2%、「わからない」は1.7%であった。「罰せられることはない（「1回くらいなら」を含む）」と回答した人もわずかに存在した。

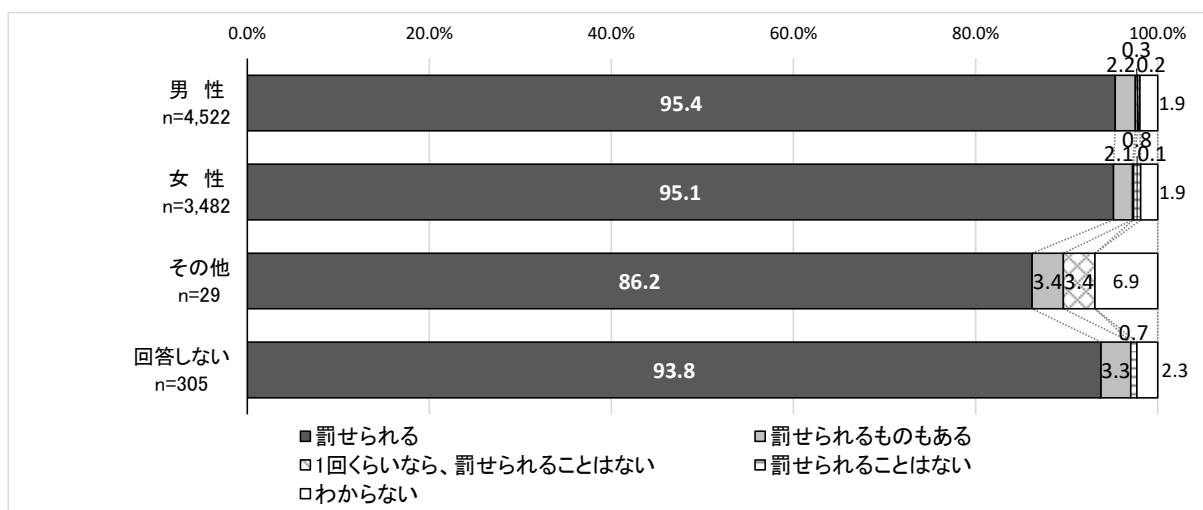
この傾向は過去2年間の調査結果と同様であり、性別による差はみられない。

図表7 薬物使用等への処罰に関する認識

《3 か年調査比較》



《性別比較》



	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査 全体		令和5年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
罰せられる	14,565	95.6	4,312	95.4	3,313	95.1	25	86.2	286	93.8	13,052	94.0	16,467	94.3
罰せられるものもある	333	2.2	99	2.2	73	2.1	1	3.4	10	3.3	357	2.6	450	2.6
1回くらいなら、罰せられることはない	20	0.1	11	0.2	4	0.1	1	3.4	0	0.0	12	0.1	15	0.1
罰せられることはない	50	0.3	12	0.3	27	0.8	0	0.0	2	0.7	38	0.3	44	0.3
わからない	263	1.7	88	1.9	65	1.9	2	6.9	7	2.3	429	3.1	489	2.8

(8) 薬物についての学習経験の有無

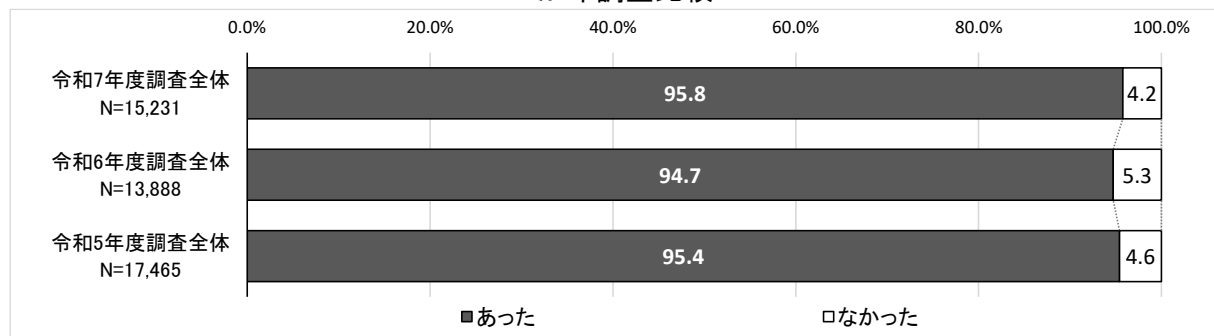
問 7 あなたは、これらの薬物について学んだり聞いたりしたことがありますか。
(どちらかを選択)

質問 4 で提示した薬物についてこれまでに学んだり聞いたりしたことがあるかについては、
95.8%が「あった」と回答している。

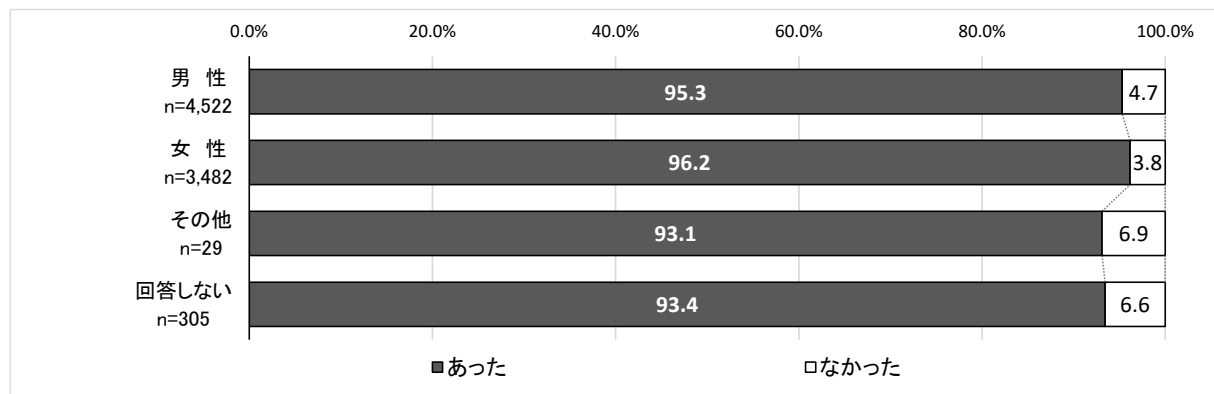
この傾向は過去 2 年間の調査結果と同様であり、性別による差はみられない。

図表 8 薬物についての学習経験の有無

《3 か年調査比較》



《性別比較》



	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査 全体		令和5年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
あった	14,587	95.8	4,309	95.3	3,348	96.2	27	93.1	285	93.4	13,155	94.7	16,665	95.4
なかった	644	4.2	213	4.7	134	3.8	2	6.9	20	6.6	733	5.3	800	4.6

(9) 薬物使用時の症状に関する認知状況

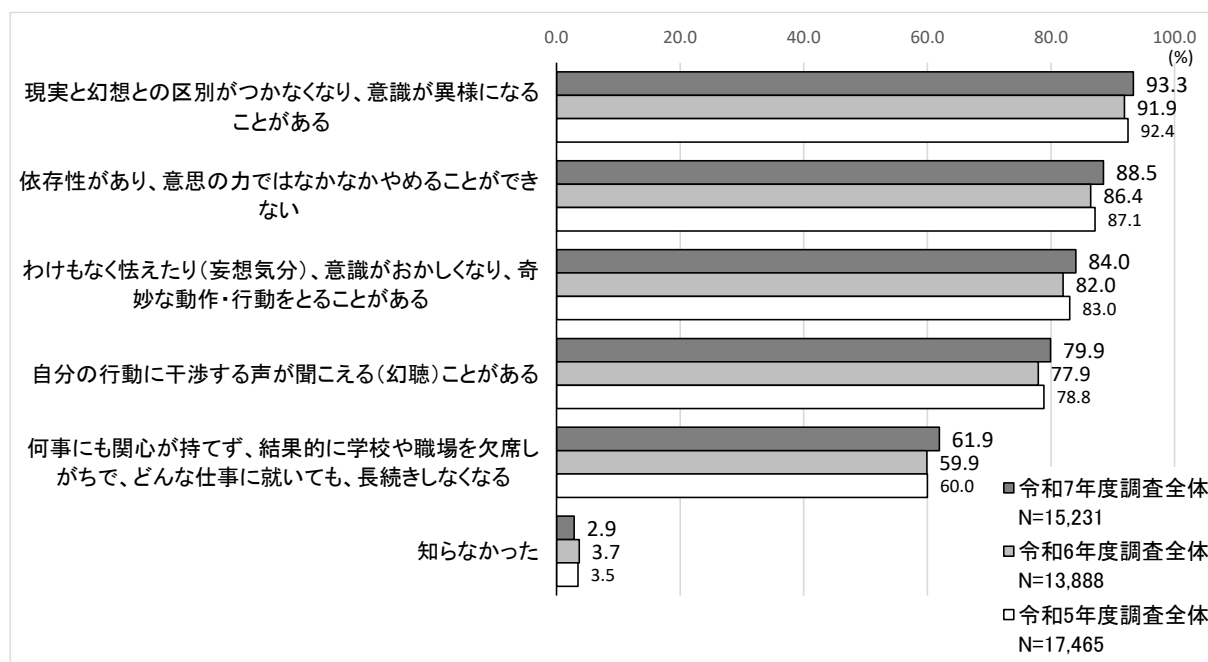
問 8 あなたは、薬物を使った場合、以下のようになることがあるのを知っていましたか。(複数選択可)

質問 4 で提示した薬物の使用時の症状を 5 つ提示し、このような症状になることの認知状況については、ほとんどの回答者が提示したいずれかの症状を選択し、「知らなかった」と回答した割合は 2.9%であった。知っている症状としては、「現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある」が 93.3%、「依存症があつたり、意思の力ではなかなかやめることができない」が 88.5%、「わけもなく怯えたり(妄想気分)、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある」が 84.0%、「自分の行動に干渉する声が聞こえる(幻聴)ことがある」が 79.9%、「何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる」が 61.9%となっている。

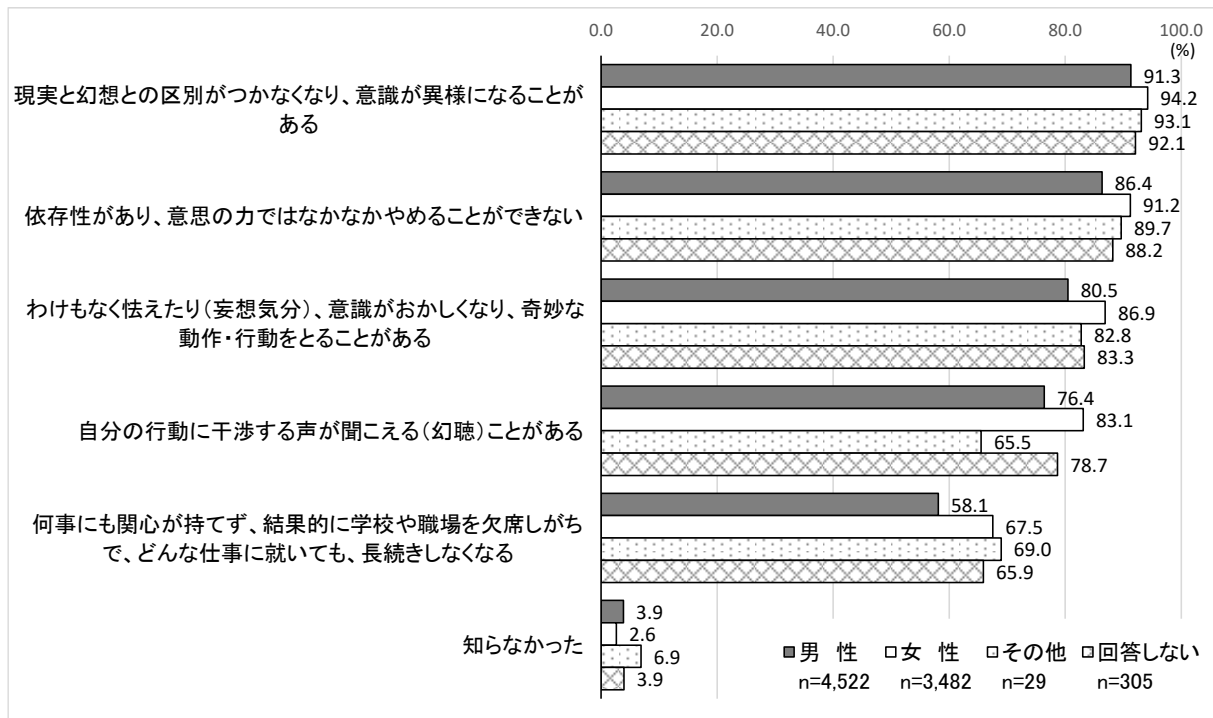
過去 2 年の調査と比較すると、傾向は概ね同様であるが、全体としては昨年度よりも症状を認知している割合がやや高い。

性別にみると、「男性」は他と比べて、使用時の症状 5 項目について認知している割合がいずれもやや低い。

図表 9 薬物使用時の症状に関する認知状況
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査		令和5年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある	14,218	93.3	4,130	91.3	3,281	94.2	27	93.1	281	92.1	12,760	91.9	16,145	92.4
わけもなく怯えたり(妄想気分)、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある	12,796	84.0	3,639	80.5	3,026	86.9	24	82.8	254	83.3	11,382	82.0	14,499	83.0
自分の行動に干渉する声が聞こえる(幻聴) ことがある	12,173	79.9	3,455	76.4	2,894	83.1	19	65.5	240	78.7	10,823	77.9	13,771	78.8
何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる	9,432	61.9	2,629	58.1	2,351	67.5	20	69.0	201	65.9	8,321	59.9	10,477	60.0
依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない	13,478	88.5	3,905	86.4	3,176	91.2	26	89.7	269	88.2	12,002	86.4	15,215	87.1
知らなかった	436	2.9	175	3.9	91	2.6	2	6.9	12	3.9	513	3.7	608	3.5
累計	62,533		17,933		14,819		118		1,257		55,801		70,715	

(10) 薬物についての情報源

問9 あなたは、これらの薬物について何から情報を得ましたか。(複数選択可)

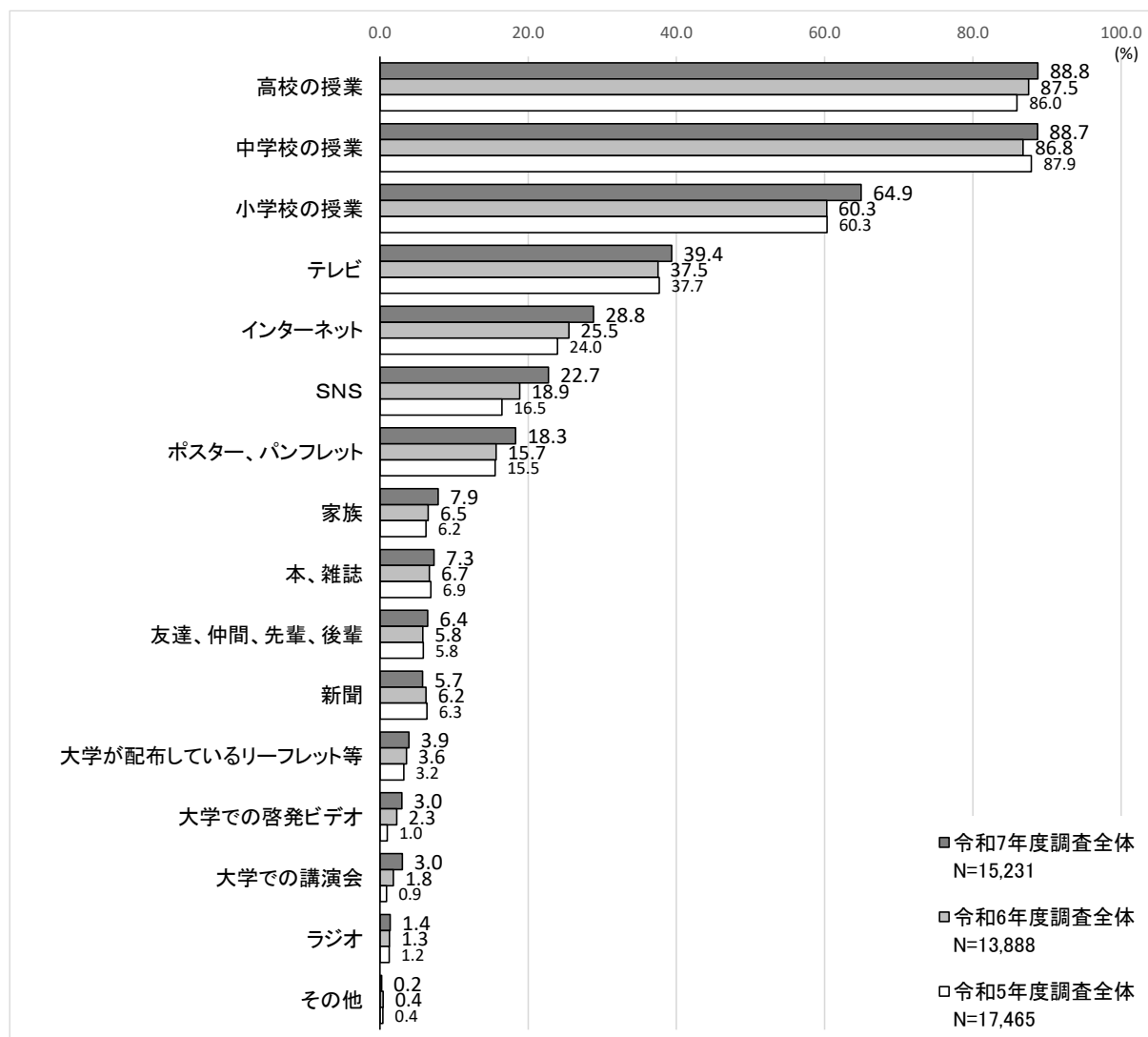
質問4で提示した薬物についての情報源は、88.8%が「高校の授業」、88.7%が「中学校の授業」と、9割近くが中学校・高校で情報を得ている。「小学校の授業」も64.9%と上位に次いで高く、大学に進学する前に学校の授業で薬物についての何らかの情報を入手している。

過去2年間の調査と比較すると、小・中・高校の授業で情報を得たとする割合は増加しており、それ以外の選択肢については概ね同程度の割合で推移している。

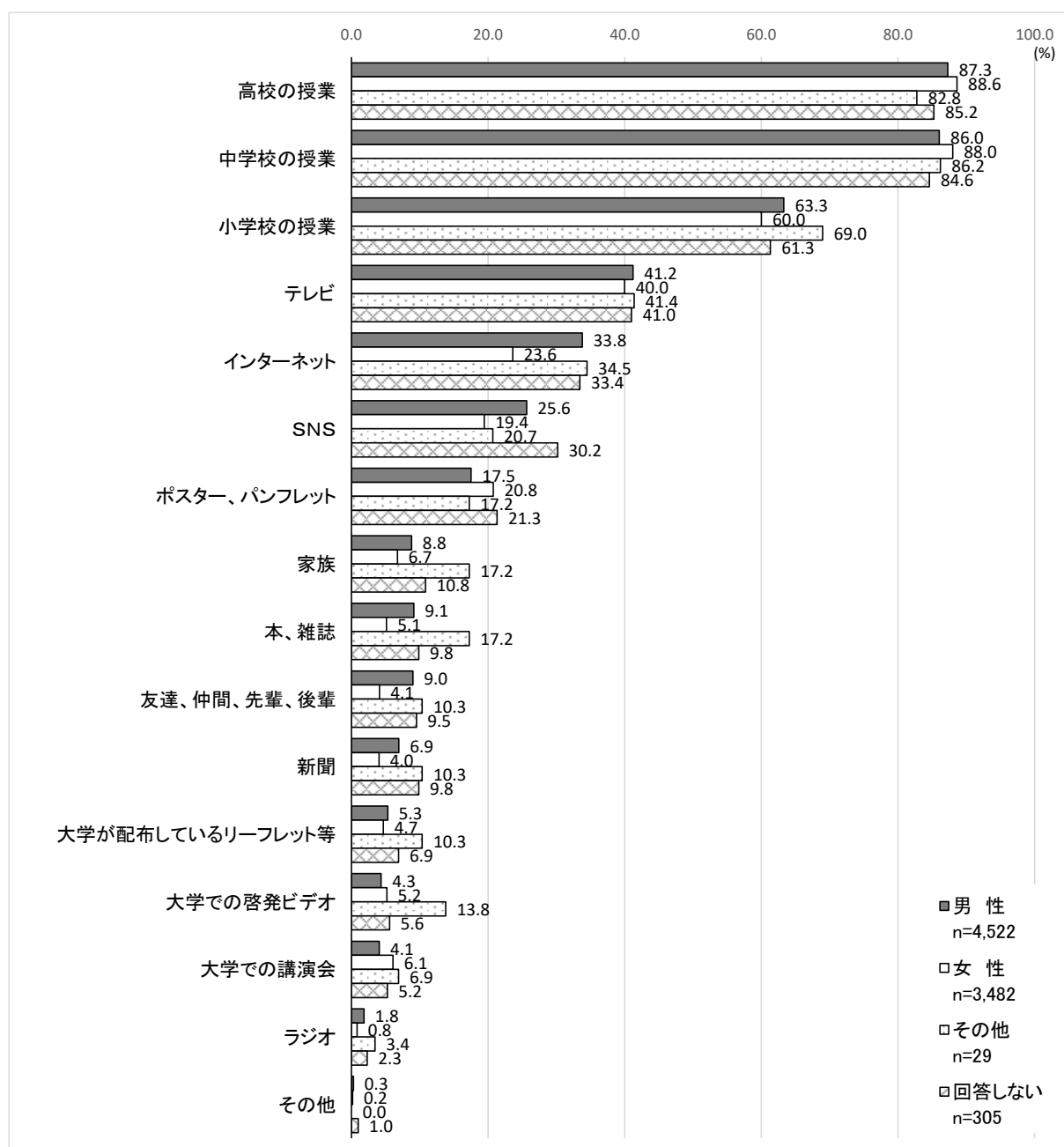
性別にみると、「女性」は他に比べて、「インターネット」、「SNS」を情報源としている割合が低い。

「その他」として記載された内容をみると、「ドラマ・映画・演劇」や「報道」、「(高校等での)講演会」など、具体的な情報源が挙げられている。

図表 10 薬物についての情報源
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査 全体		令和5年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
小学校の授業	9,890	64.9	2,862	63.3	2,089	60.0	20	69.0	187	61.3	8,371	60.3	10,534	60.3
中学校の授業	13,514	88.7	3,891	86.0	3,064	88.0	25	86.2	258	84.6	12,050	86.8	15,352	87.9
高校の授業	13,523	88.8	3,947	87.3	3,086	88.6	24	82.8	260	85.2	12,155	87.5	15,014	86.0
大学が配布しているリーフレット等	596	3.9	240	5.3	162	4.7	3	10.3	21	6.9	498	3.6	561	3.2
大学での啓発ビデオ	451	3.0	196	4.3	180	5.2	4	13.8	17	5.6	315	2.3	171	1.0
大学での講演会	460	3.0	184	4.1	211	6.1	2	6.9	16	5.2	253	1.8	153	0.9
友達、仲間、先輩、後輩	981	6.4	406	9.0	143	4.1	3	10.3	29	9.5	804	5.8	1,020	5.8
家族	1,197	7.9	398	8.8	234	6.7	5	17.2	33	10.8	906	6.5	1,087	6.2
ポスター、パンフレット	2,790	18.3	792	17.5	723	20.8	5	17.2	65	21.3	2,175	15.7	2,715	15.5
本、雑誌	1,111	7.3	413	9.1	178	5.1	5	17.2	30	9.8	927	6.7	1,199	6.9
新聞	875	5.7	313	6.9	140	4.0	3	10.3	30	9.8	865	6.2	1,108	6.3
テレビ	5,995	39.4	1,863	41.2	1,392	40.0	12	41.4	125	41.0	5,213	37.5	6,580	37.7
ラジオ	211	1.4	83	1.8	28	0.8	1	3.4	7	2.3	179	1.3	216	1.2
インターネット	4,391	28.8	1,528	33.8	822	23.6	10	34.5	102	33.4	3,540	25.5	4,184	24.0
SNS	3,464	22.7	1,159	25.6	677	19.4	6	20.7	92	30.2	2,618	18.9	2,873	16.5
その他	34	0.2	13	0.3	6	0.2	0	0.0	3	1.0	61	0.4	69	0.4
累計	59,483		18,288		13,135		128		1,275		50,930		62,836	

図表 11 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
ドラマ・映画・演劇	5	警察の講義	1
報道	3	市のイベント	1
(高校等での) 講演会	3	啓発動画	1
ゲーム	3	YouTube	1
ヒップホップ	2	精神科	1
大学の授業等	2	監督の講話	1
知人	2	海外留学	1
裁判傍聴	2	前科者	1
		その他	3
		無効	1

(11) 薬物の怖さについての更なる学習について

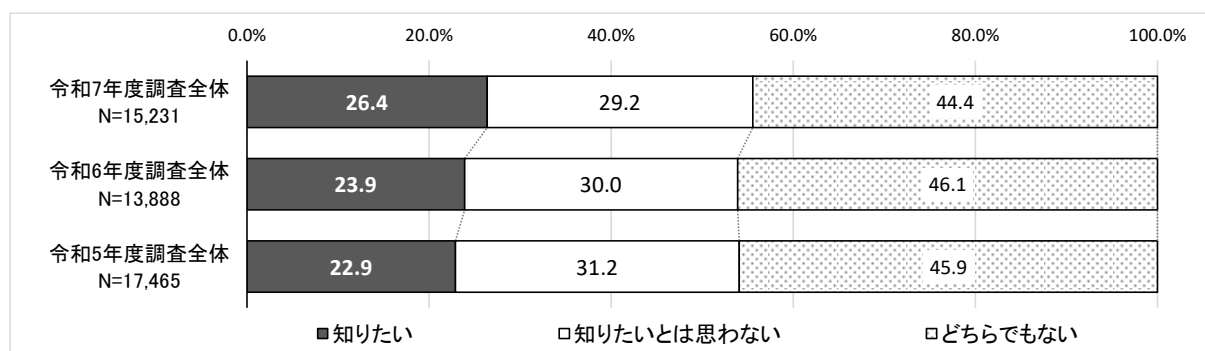
問 10 あなたは、これらの薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）をもっと知りたいですか。（1つ選択）

質問 4 で提示した薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）についてもっと知りたいかについては、「どちらでもない」の回答割合が 44.4%と最も高く、次いで「知りたいとは思わない」が 29.2%、「知りたい」が 26.4%となっている。

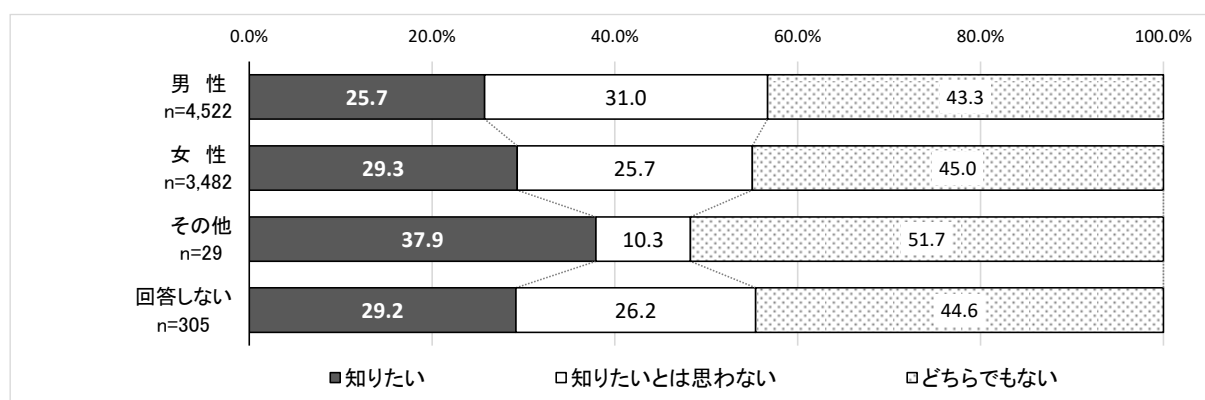
過去 2 年の調査と比べると、「どちらでもない」の割合が減り、「知りたい」が増えている。

性別にみると、「男性」は、「女性」や性別を「回答しない」とした人に比べて「知りたい」の割合がやや低い。

図表 12 薬物の怖さについての更なる学習の必要性
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査全体		令和5年度調査全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
知りたい	4,018	26.4	1,164	25.7	1,021	29.3	11	37.9	89	29.2	3,318	23.9	3,998	22.9
知りたいとは思わない	4,443	29.2	1,400	31.0	895	25.7	3	10.3	80	26.2	4,164	30.0	5,443	31.2
どちらでもない	6,770	44.4	1,958	43.3	1,566	45.0	15	51.7	136	44.6	6,406	46.1	8,024	45.9

(12) 薬物の害を学ぶ場

問 11 あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。(複数選択可)

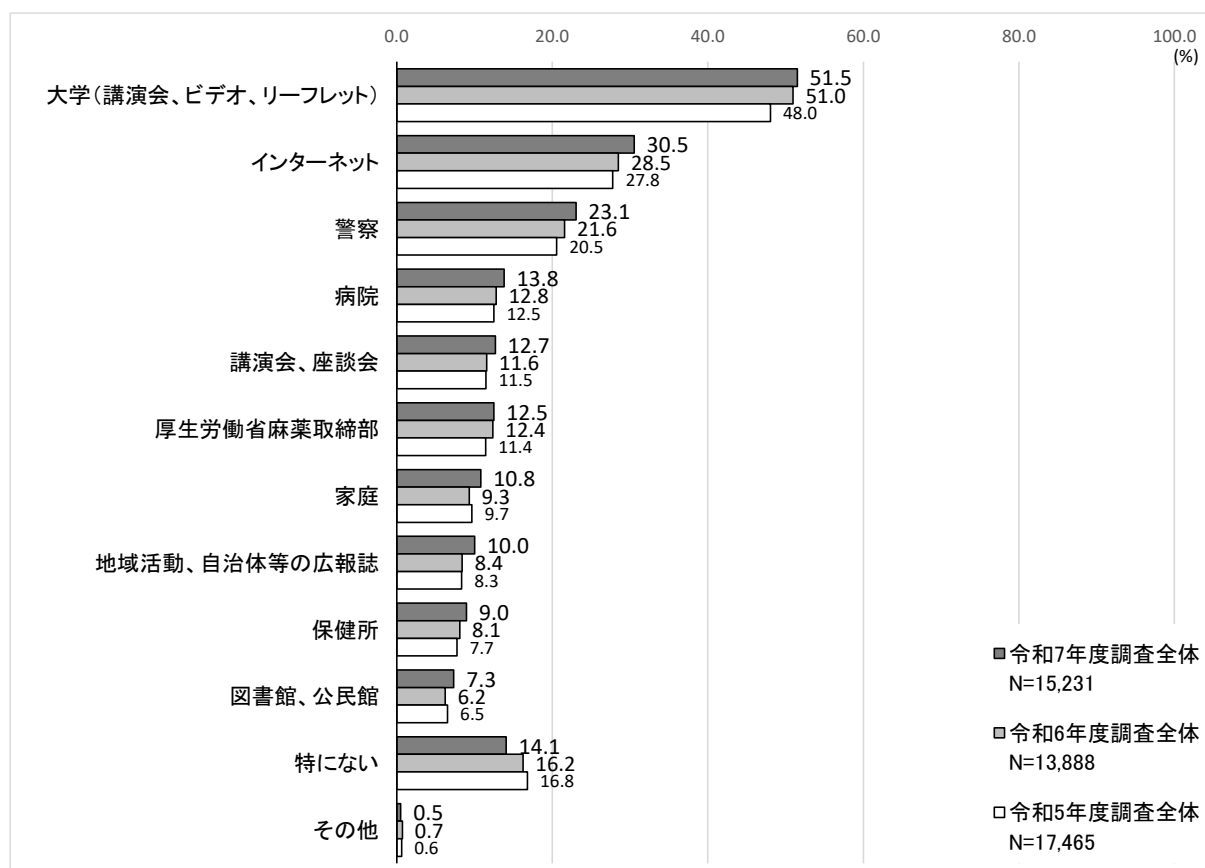
質問 4 で提示した薬物を使った場合の害について学ぶ場としては、「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」の回答割合が 51.5%と最も高く、「インターネット」が 30.5%、「警察」が 23.1%となっている。

過去 2 年の調査と比較すると、全体的な傾向に大きな違いはみられないが、「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」をはじめ、上位 4 番目までの選択肢の割合はやや増加している。

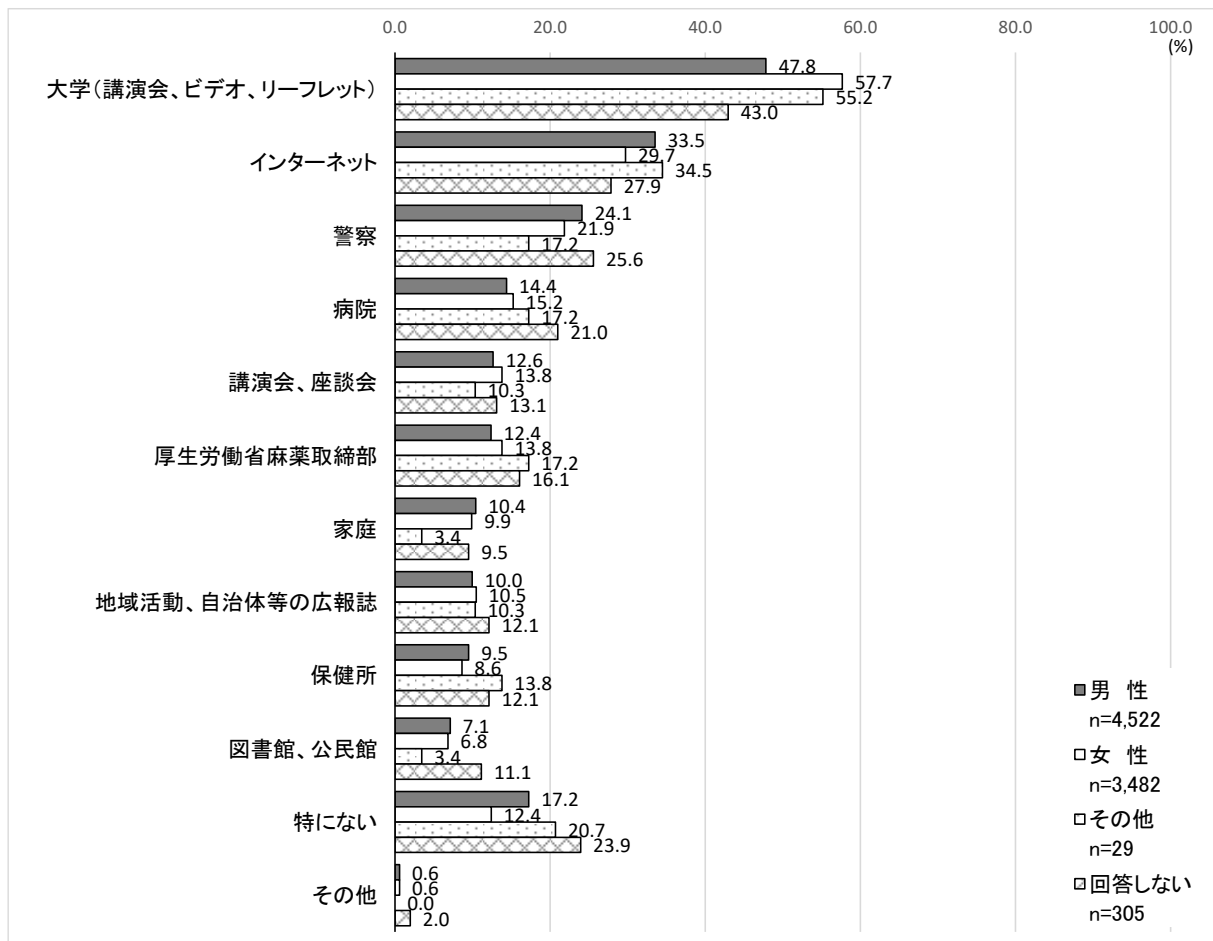
性別にみると、「女性」は、「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」を選択する割合が他よりも高い傾向にある。

また、「その他」として記載された内容には、大学入学までの小・中・高校などで学ぶのが望ましいとするものが多い。「テレビ」、「SNS など」の他、「薬物使用経験者・更生施設」と具体的な事例や実体験に触れる場を挙げる記載もみられた。

図表 13 薬物の害を学ぶ場
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査		令和5年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
大学(講演会、ビデオ、リーフレット)	7,847	51.5	2,163	47.8	2,008	57.7	16	55.2	131	43.0	7,078	51.0	8,391	48.0
家庭	1,649	10.8	471	10.4	345	9.9	1	3.4	29	9.5	1,295	9.3	1,688	9.7
地域活動、自治体等の広報誌	1,527	10.0	451	10.0	365	10.5	3	10.3	37	12.1	1,170	8.4	1,457	8.3
図書館、公民館	1,116	7.3	322	7.1	238	6.8	1	3.4	34	11.1	866	6.2	1,140	6.5
保健所	1,364	9.0	430	9.5	301	8.6	4	13.8	37	12.1	1,126	8.1	1,351	7.7
警察	3,512	23.1	1,091	24.1	761	21.9	5	17.2	78	25.6	2,998	21.6	3,589	20.5
厚生労働省麻薬取締部	1,902	12.5	560	12.4	481	13.8	5	17.2	49	16.1	1,718	12.4	1,998	11.4
病院	2,104	13.8	651	14.4	531	15.2	5	17.2	64	21.0	1,775	12.8	2,184	12.5
インターネット	4,653	30.5	1,516	33.5	1,035	29.7	10	34.5	85	27.9	3,959	28.5	4,853	27.8
講演会、座談会	1,933	12.7	572	12.6	481	13.8	3	10.3	40	13.1	1,605	11.6	2,004	11.5
特になし	2,143	14.1	780	17.2	432	12.4	6	20.7	73	23.9	2,256	16.2	2,934	16.8
その他	79	0.5	27	0.6	21	0.6	0	0.0	6	2.0	102	0.7	109	0.6
累計	29,829		9,034		6,999		59		663		25,948		31,698	

図表 14 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
学校(小・中・高校いずれかを含む)	40	漫画	1
幼稚園・保育園	2	映画	1
大学・研究施設	2	ゲーム	1
テレビ、CM・広告	10	本	1
SNS・WEB 等のネットツール	6	各層に合った場所	1
薬物使用経験者・更生施設	6	法教育	1
自然と目につく場	2	外国	1
		その他	3
		無効	1

(13) 薬物使用者が増加している理由

問 12 あなたは、これらの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思いますか。(複数選択可)

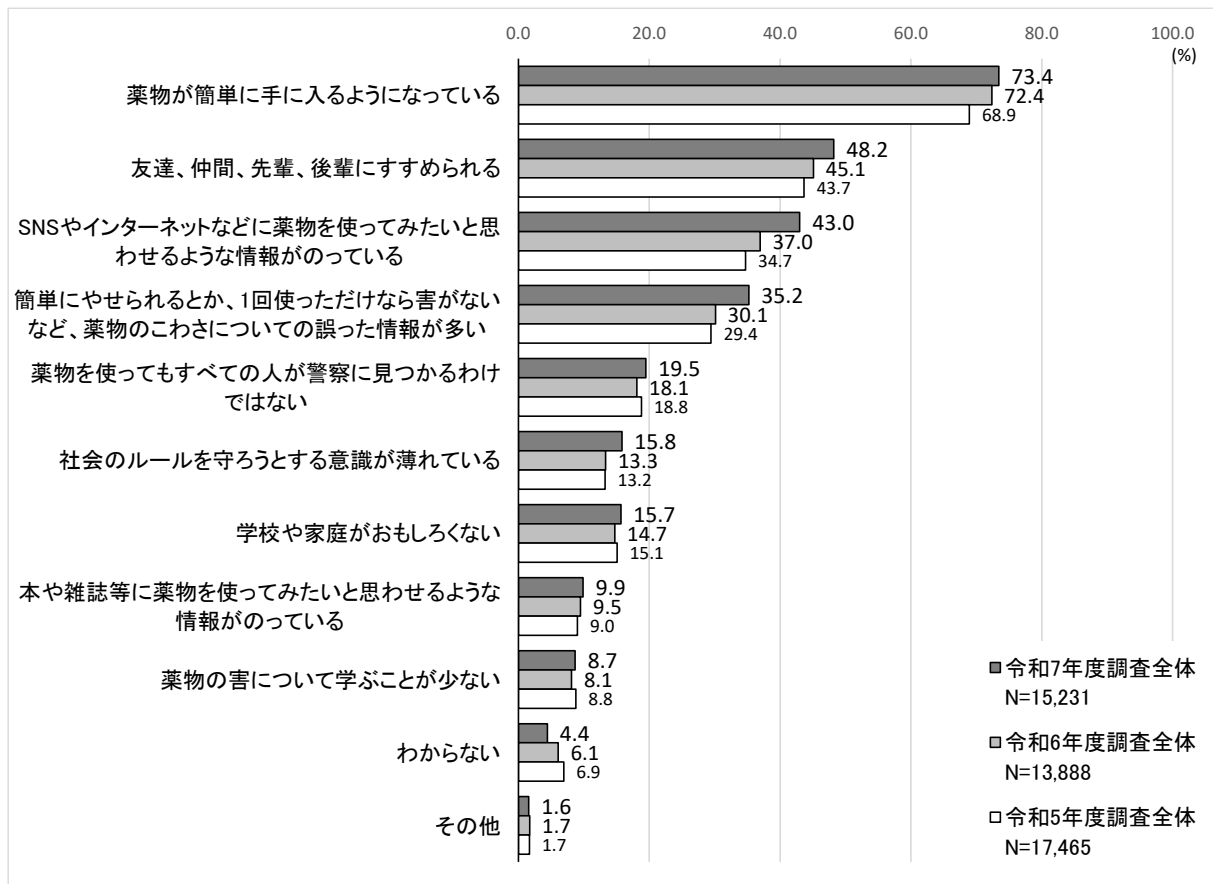
質問 4 で提示した薬物を使う人が増えている理由として、「薬物が簡単に手に入るようになっている」が 73.4%、「友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる」が 48.2%、「SNS やインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている」が 43.0%、「簡単にやせられるとか、1 回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い」が 35.2%となっている。

過去 2 年の調査と傾向に違いはないが、上位 4 番目までの選択肢の割合が増えている。

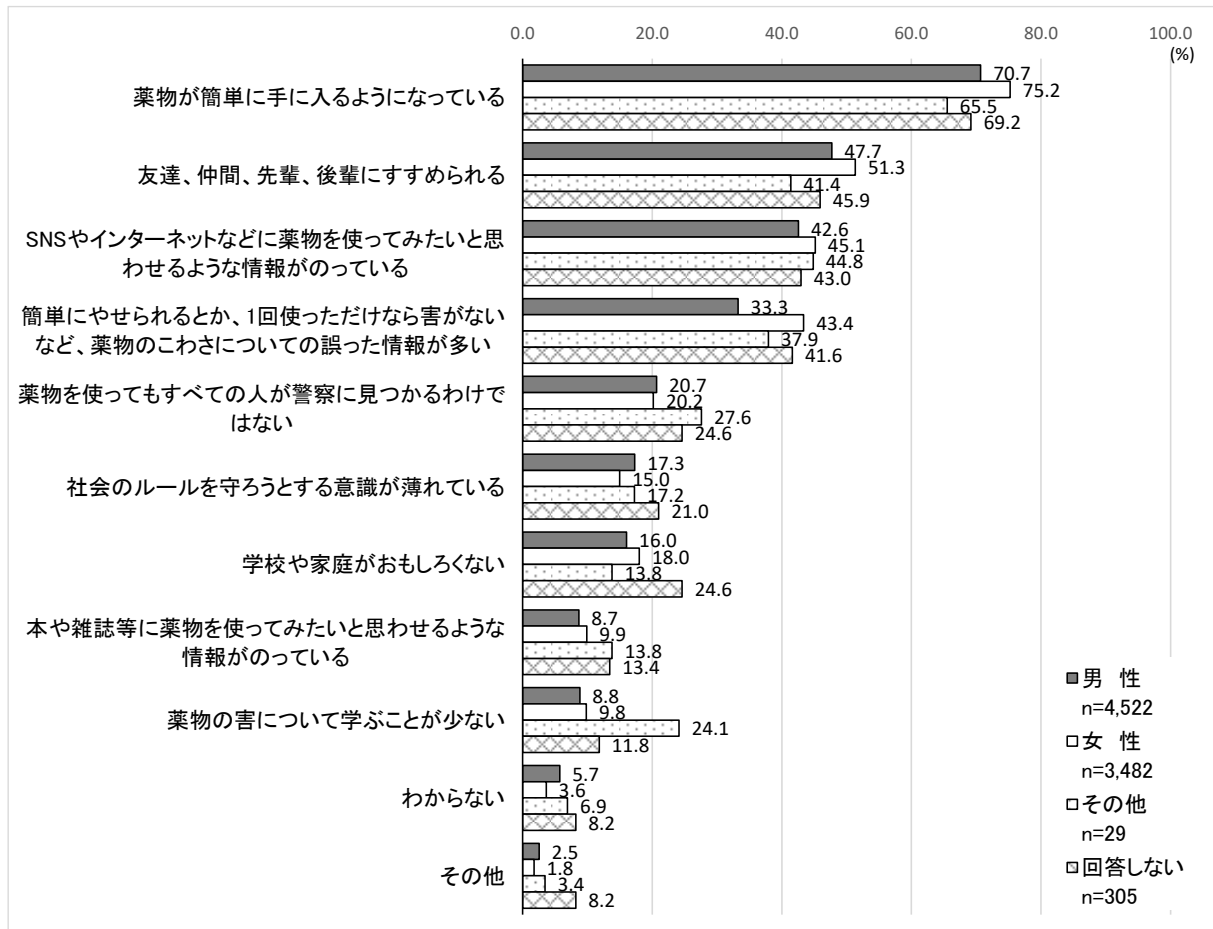
性別にみると、「女性」は、「薬物が簡単に手に入るようになっている」、「友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる」、「簡単にやせられるとか、1 回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い」の回答割合が、他に比べて高い。

「その他」として記載された内容を見ると、「ストレス（回避）」、「社会の問題」、「現実逃避」、「生きづらさ」、「(将来への) 不安」など、社会の中で生きていく上での課題に着目した回答が多くみられる。一方で、「バカだから」、「自暴自棄」、「判断力の低下」、「興味本位・好奇心」など、薬物を使用する人個人の行動や判断を問題視するものもあった。さらに、「誤った情報の流布」、「入手しやすくなった」との回答もみられる。

図表 15 薬物使用者が増加している理由
 ≪3 か年調査比較≫



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査		令和5年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
薬物が簡単に手に入るようになっている	11,186	73.4	3,196	70.7	2,620	75.2	19	65.5	211	69.2	10,049	72.4	12,039	68.9
本や雑誌等に薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている	1,508	9.9	392	8.7	345	9.9	4	13.8	41	13.4	1,321	9.5	1,577	9.0
SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている	6,550	43.0	1,925	42.6	1,572	45.1	13	44.8	131	43.0	5,135	37.0	6,065	34.7
社会のルールを守ろうとする意識が薄れている	2,410	15.8	781	17.3	521	15.0	5	17.2	64	21.0	1,852	13.3	2,314	13.2
薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない	2,967	19.5	934	20.7	702	20.2	8	27.6	75	24.6	2,515	18.1	3,285	18.8
簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い	5,364	35.2	1,504	33.3	1,510	43.4	11	37.9	127	41.6	4,185	30.1	5,142	29.4
薬物の害について学ぶことが少ない	1,321	8.7	399	8.8	342	9.8	7	24.1	36	11.8	1,127	8.1	1,536	8.8
友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる	7,341	48.2	2,157	47.7	1,788	51.3	12	41.4	140	45.9	6,263	45.1	7,627	43.7
学校や家庭がおもしろくない	2,386	15.7	725	16.0	627	18.0	4	13.8	75	24.6	2,046	14.7	2,638	15.1
わからない	674	4.4	259	5.7	127	3.6	2	6.9	25	8.2	844	6.1	1,210	6.9
その他	243	1.6	115	2.5	61	1.8	1	3.4	25	8.2	239	1.7	299	1.7
累計	41,950		12,387		10,215		86		950		35,576		43,732	

図表 16 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
ストレス(回避)	46	合法的な国がある	3
社会の問題	31	ヒップホップ等の影響・カルチャー化	3
現実逃避	20	お金のため	2
生きづらさ	14	現実逃避・好奇心	2
(将来への)不安	10	外国人の増加	2
精神的苦痛・問題	9	周囲に流されている	2
(カッコいいと)勘違い	8	取り締まりの低下	1
薬物と認識・判断できないものがある	8	犯罪意識の低下	1
自暴自棄	7	治安の悪化	1
バカだから	7	芸能人が使っている	1
騙される	7	衝動的	1
誤った情報の流布	7	抛り所	1
興味本位・好奇心	6	注意をひくため	1
判断力の低下	5	仕事の効率アップ	1
生育環境	5	幸福感を求めて	1
孤独・孤立感	4	メンタルサポートのなさ	1
自己肯定感の低下	3	半グレ	1
倫理観の欠如	3	断りにくい雰囲気	1
危機感の欠如	3	勘違い・自暴自棄	1
入手しやすくなった	3	他人事	1
断れない性格・気持ちが弱い	3	その他	2
自信過剰	3	無効	1

(14) 薬物使用についての考え

問 13 あなたは、これらの薬物を使うことについてどのように考えていますか。
(1つ選択)

質問 4 で提示した薬物を使うことについての回答者の考えについては、91.1%が「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」と回答している。なお、「他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である」が 7.4%、「1 回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない」が 0.7%である。

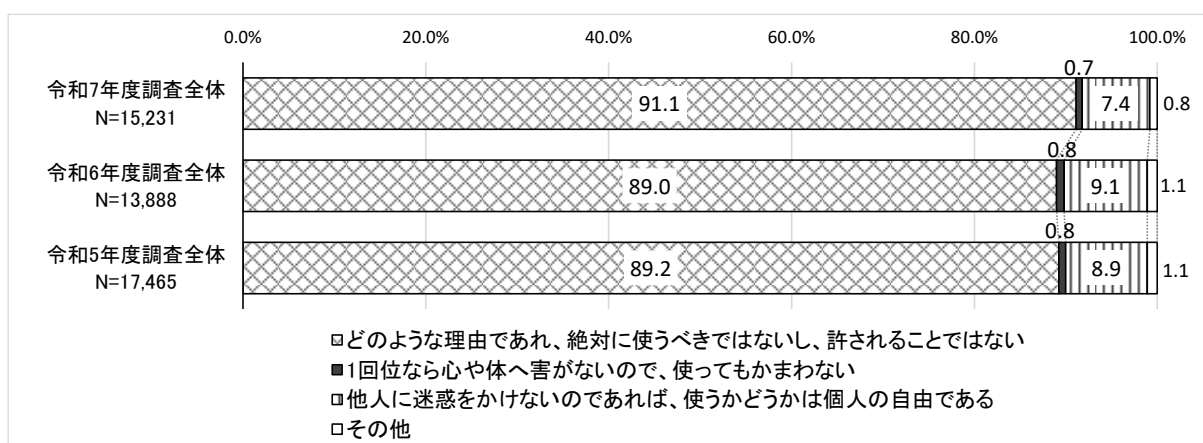
過去 2 年の調査と比べると、「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」の割合がやや増えている。

性別にみると、「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」の割合は、「女性」が他に比べて高かった。一方で、「他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である」とした割合は、「男性」が 9.8%、性別を「回答しない」

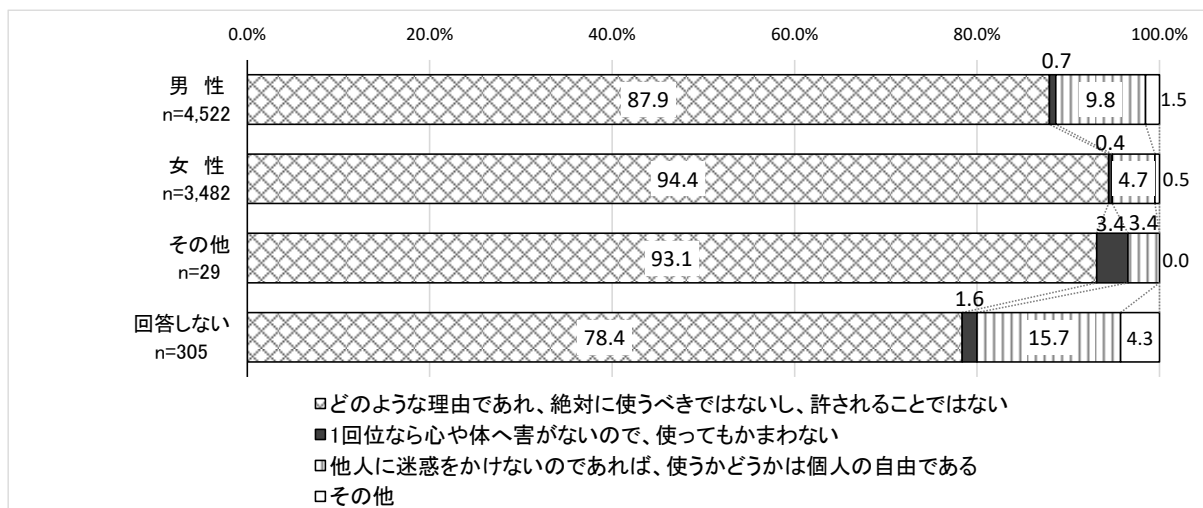
とした人が 15.7%であった。

「その他」として記載された内容をみると、「医療的使用は容認」するものや、「使用すべきではない」とする回答も多くみられた。一方で「自己責任」、「日本国内では使用すべきでない」や「海外で使用するべき」との回答もある。また、少数ながら「使わせる社会・環境の問題」や「強要・仕組まれて使用した場合の対応」、「薬物使用者への支援強化」など、社会的なフォロー体制の必要性を訴える回答もあった。

図表 17 薬物使用についての考え
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査全体		令和5年度調査全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない	13,878	91.1	3,976	87.9	3,288	94.4	27	93.1	239	78.4	12,356	89.0	15,582	89.2
1回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない	102	0.7	32	0.7	13	0.4	1	3.4	5	1.6	116	0.8	131	0.8
他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である	1,125	7.4	445	9.8	163	4.7	1	3.4	48	15.7	1,263	9.1	1,560	8.9
その他	126	0.8	69	1.5	18	0.5	0	0.0	13	4.3	153	1.1	192	1.1

図表 18 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
医療使用は容認	26	自分の人生を壊す	1
医療的使用以外使用すべきではない	2	倫理観の欠如と購入と言う愚行	1
使用目的・理由による	2	メリットがない	1
使用すべきでない	14	現実逃避したい人がいる限りなくなる	1
自己責任	14	弱さにつけこまれた	1
使わせる社会・環境の問題	7	友人は止める・他人は自業自得	1
日本国内では使用すべきでない	7	興味はあるが理性で対応	1
合法的な国で使用すべき	6	行政・支援団体を頼る	1
法律違反・犯罪行為	5	なるべく使わない方がよい	1
社会や他者に迷惑をかける・害悪	5	使用者は国外追放	1
許されるなら試してみたい	3	場合による	1
バカなこと	2	人による	1
他人に迷惑をかけなければよい	2	どれもしっくりこない	1
関わらない・巻き込まれたくない	2	無関心	3
強要・仕組まれて使用した場合の対応が必要	2	興味なし	2
薬物使用者への支援強化	2	わからない	1
(自分は)使わない	2	特に何も思わない	1
人間崩壊	2	無効	1

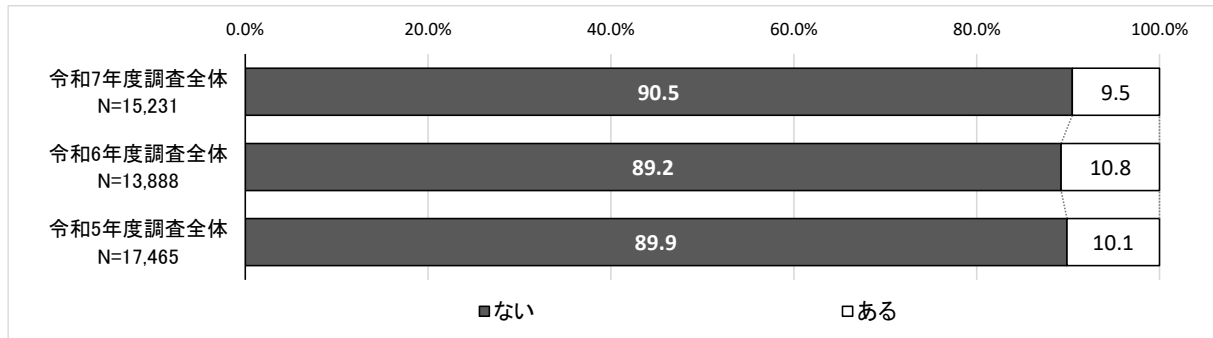
(15) 薬物使用の現場に居合わせたことの有無

問 14 あなたは、これらの薬物が使用されているところを直接見たことがありますか。
〈テレビ、映画、報道等で観たものは除きます〉(どちらかを選択)

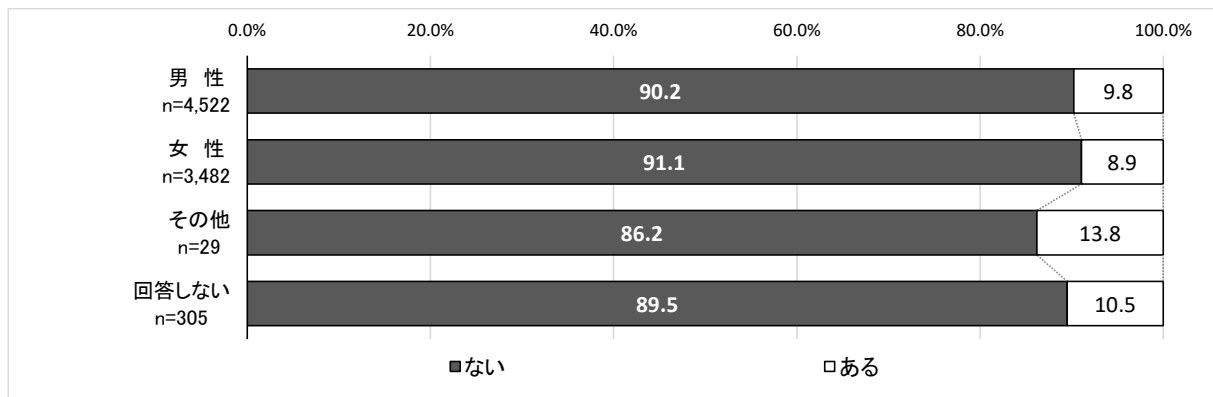
質問 4 で提示した薬物が使用されているところを直接見たことがあるかについては、90.5%が「ない」と回答した一方、9.5%が「ある」と回答しており、約 10 人に 1 人が薬物使用の現場を目撃あるいは居合わせたことになる。

過去 2 年の調査と比べても、概ね同様の傾向であり、性別による差はみられなかった。

図表 19 薬物使用の現場に居合わせたことの有無
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査 全体		令和5年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
ない	13,778	90.5	4,080	90.2	3,171	91.1	25	86.2	273	89.5	12,393	89.2	15,696	89.9
ある	1,453	9.5	442	9.8	311	8.9	4	13.8	32	10.5	1,495	10.8	1,769	10.1

(16) 薬物使用等の勧誘経験の有無

問 15 あなたは、これらの薬物を使用することや購入することを誘われたり、勧められたりすることが、これまでにありましたか。(1つ選択)

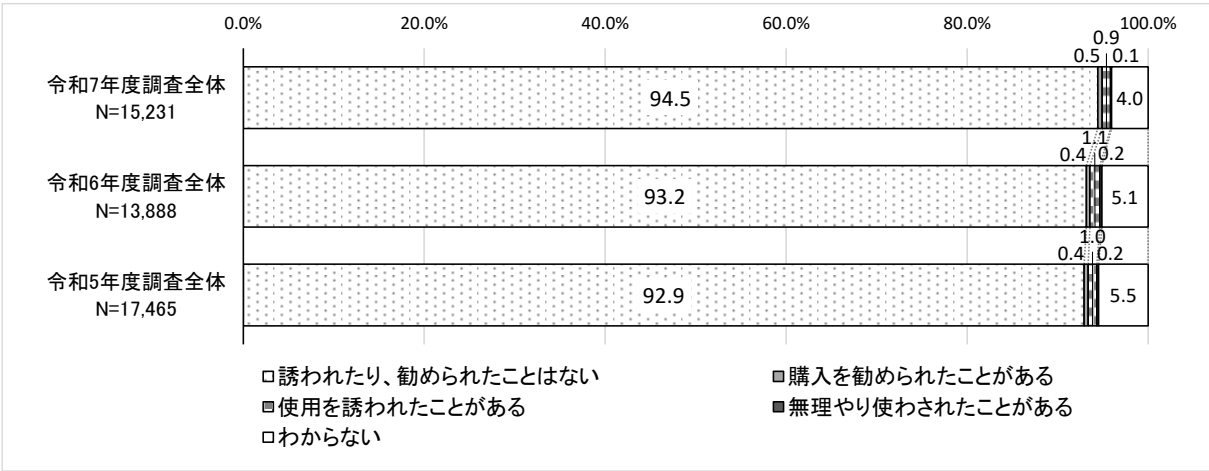
質問 4 で提示した薬物の使用や購入を誘われたり、勧められた経験については、94.5%が「誘われたり、勧められたことはない」と回答した。一方で、「ある」(「購入を勧められたことがある」、「使用を誘われたことがある」、「無理やり使わされたことがある」の合計)は1.5%であり、100人に1人以上が薬物購入や使用の場面に直面したことになる。

なお、この傾向は過去2年の調査と同様である。

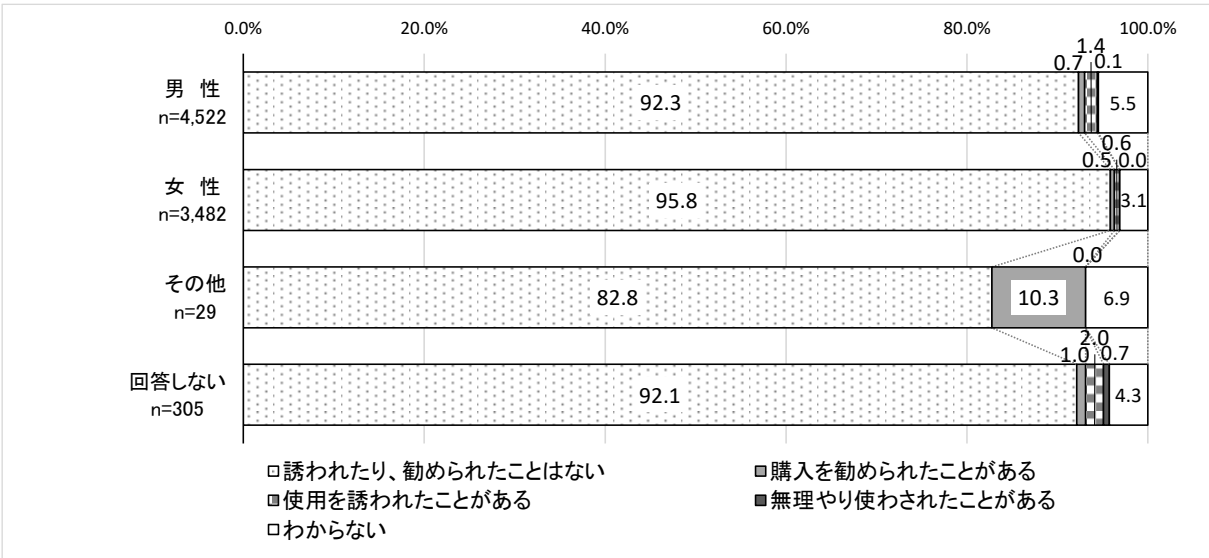
性別にみると、「誘われたり、勧められたことはない」の割合は、「女性」が他に比べてやや高い。一方、「(「購入を勧められたことが」「使用を誘われたことが」「無理やり使わされたことが)」ある」については「男性」および性別を「回答しない」とした人が「女性」よりや

や高かった。

図表 20 薬物使用等の勧誘経験の有無
《3 か年調査比較》



《性別比較》



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査全体		令和5年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
誘われたり、勧められたことはない	14,386	94.5	4,175	92.3	3,337	95.8	24	82.8	281	92.1	12,941	93.2	16,231	92.9
購入を勧められたことがある	71	0.5	31	0.7	16	0.5	3	10.3	3	1.0	55	0.4	75	0.4
使用を誘われたことがある	142	0.9	63	1.4	20	0.6	0	0.0	6	2.0	150	1.1	168	1.0
無理やり使わされたことがある	18	0.1	5	0.1	1	0.0	0	0.0	2	0.7	31	0.2	33	0.2
わからない	614	4.0	248	5.5	108	3.1	2	6.9	13	4.3	711	5.1	958	5.5

(17) 薬物使用を勧誘された時の行動

問 16 あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。(複数回答可)

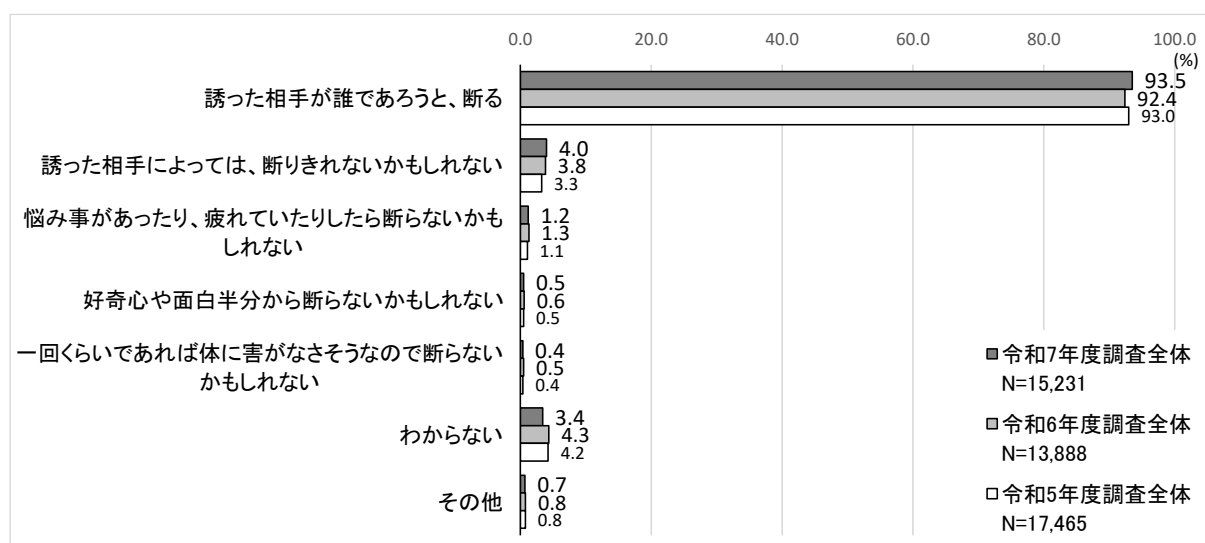
質問 4 で提示した薬物を使用することを誰かに誘われた場合、93.5%が「誘った相手が誰であろうと、断る」と回答している。一方で、「誘った相手によっては、断りきれないかもしれない」が 4.0%、「悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない」が 1.2%となっている。

過去 2 年の調査と同様に、状況によっては使用の可能性を示唆する回答がみられた。

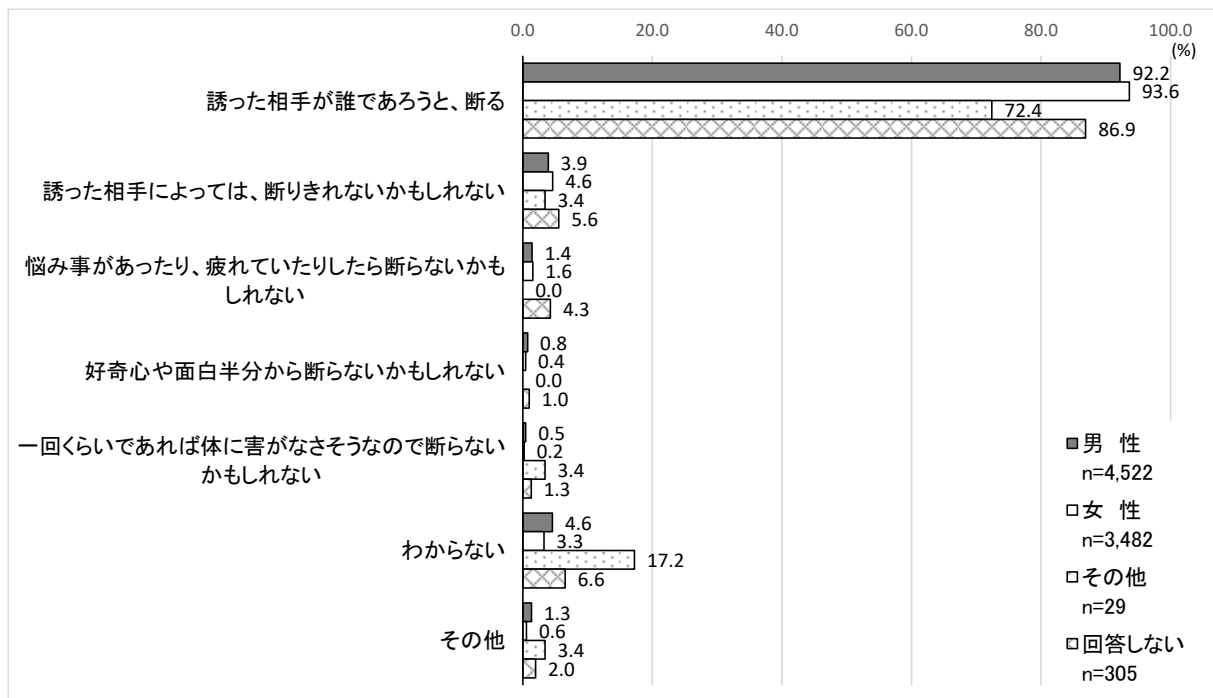
性別にみると、「誘った相手が誰であろうと、断る」の割合は、「女性」が他に比べてやや高い。

「その他」として記載された内容をみると、「通報する」、「警察に通報・連行する」、「警察に行く・相談する」と、「縁を切る・近づかない」との回答が多い中、「断れるか不安」、「自分の状況による」といった不安を示す声もあった。

図表 21 薬物使用を勧誘された時の行動
 ≪3 か年調査比較≫



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査 全体		令和5年度調査 全体	
	n	%	男性 n	%	女性 n	%	その他 n	%	回答しない n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
誘った相手が誰であろうと、断る	14,244	93.5	4,168	92.2	3,260	93.6	21	72.4	265	86.9	12,830	92.4	16,236	93.0
誘った相手によっては、断りきれないかもしれない	608	4.0	178	3.9	161	4.6	1	3.4	17	5.6	530	3.8	568	3.3
一回くらいであれば体に害がなさそうなので断らないかもしれない	55	0.4	21	0.5	8	0.2	1	3.4	4	1.3	66	0.5	67	0.4
好奇心や面白半分から断らないかもしれない	76	0.5	34	0.8	15	0.4	0	0.0	3	1.0	81	0.6	84	0.5
悩み事があつたり、疲れていたりしたら断らないかもしれない	183	1.2	65	1.4	54	1.6	0	0.0	13	4.3	184	1.3	186	1.1
わからない	520	3.4	207	4.6	114	3.3	5	17.2	20	6.6	604	4.3	739	4.2
その他	107	0.7	61	1.3	20	0.6	1	3.4	6	2.0	108	0.8	133	0.8
累計	15,793		4,734		3,632		29		328		14,403		18,013	

図表 22 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
通報する	24	話を聞く、相談相手になる	2
警察に通報・連行する	18	もらって処分する	2
警察に行く・相談する	9	証拠を押さえる	1
縁を切る・近づかない	17	断れるか不安	4
逃げる	8	自分の状況による	2
無視する	2	断らない	1
相手を殴る	5	興味がない	3
止める・説得する	4	その他	1
相談、支援を求める	3	無効	1

(18) 周囲での薬物所持・使用者の有無

問 17(ア) あなたの周囲に、これらの薬物を所持したり、使用している（いた）人がいますか。（1つ選択）

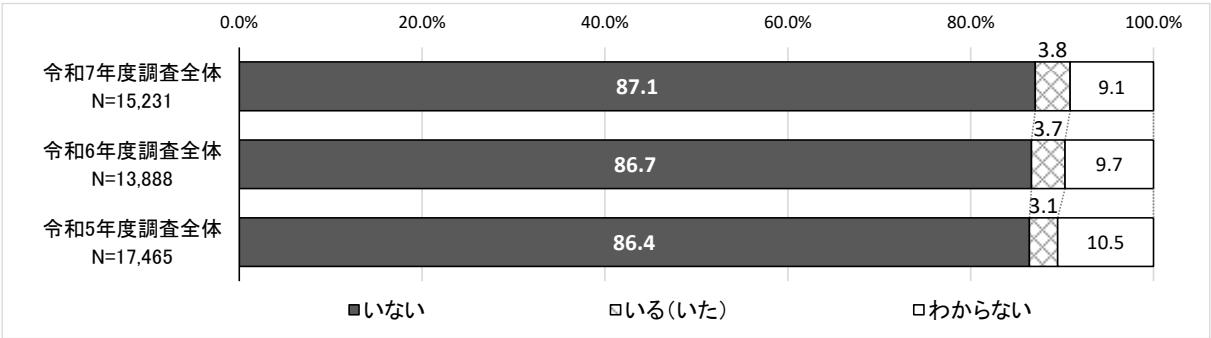
質問 17(ア)で「いる（いた）」を選択した人だけお答えください。

（イ） どの薬物でしたか。（複数回答可）

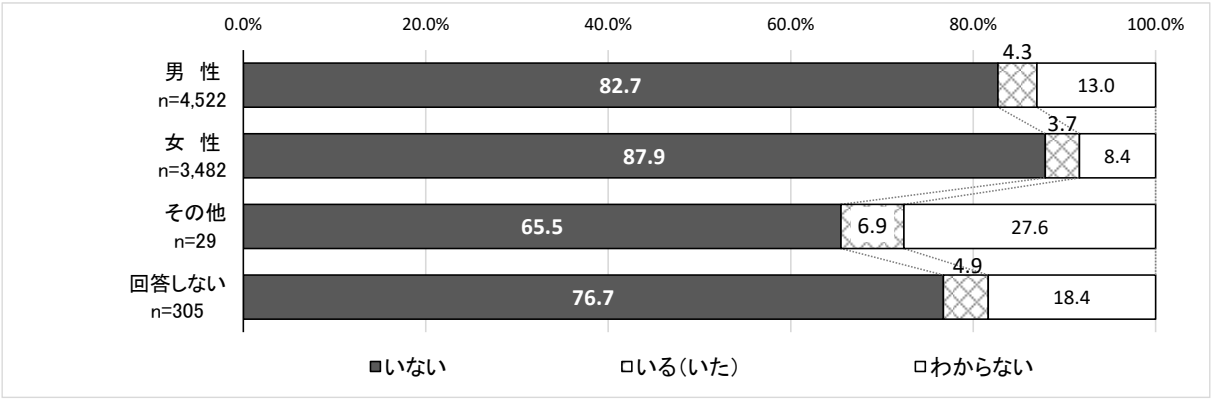
周囲に質問 4 で提示した薬物を所持したり、使用している（いた）人がいるかについては、87.1%と大半が「いない」と回答した。一方で、3.8%が「いる（いた）」と回答しており、100人のうち3人以上が所持・使用者を知っている状況にある。これは過去2年の調査と同様である。

性別にみると、「いない」と回答した割合は「女性」が他に比べてやや高かった。一方、「わからない」と回答した割合は、性別を「回答しない」とした人が他に比べて高かった。

図表 23 周囲での薬物所持・使用者の有無
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査全体		令和5年度調査全体	
	n	%	男性 n	%	女性 n	%	その他 n	%	回答しない n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
いない	13,260	87.1	3,740	82.7	3,061	87.9	19	65.5	234	76.7	12,034	86.7	15,096	86.4
いる（いた）	580	3.8	193	4.3	130	3.7	2	6.9	15	4.9	510	3.7	539	3.1
わからない	1,391	9.1	589	13.0	291	8.4	8	27.6	56	18.4	1,344	9.7	1,830	10.5

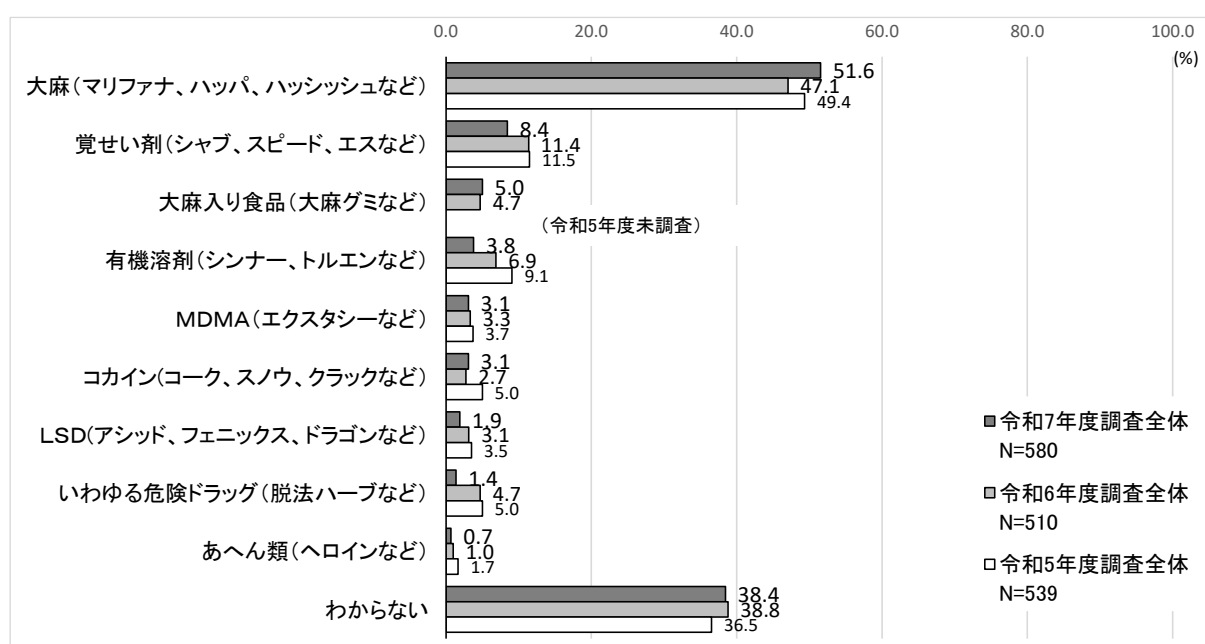
周囲に所持・使用している人が「いる（いた）」としたと回答した人に対し、所持・使用されていた薬物をたずねたところ、「大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシェなど）」の割合が51.6%と最も高い。次いで「覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）」（8.4%）、「大麻入り食品（大麻グミなど）」（5.0%）である。なお、「わからない」が38.4%であった。

過去2年の調査と比較すると、「大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシェなど）」以外の薬物の回答割合が減っている。

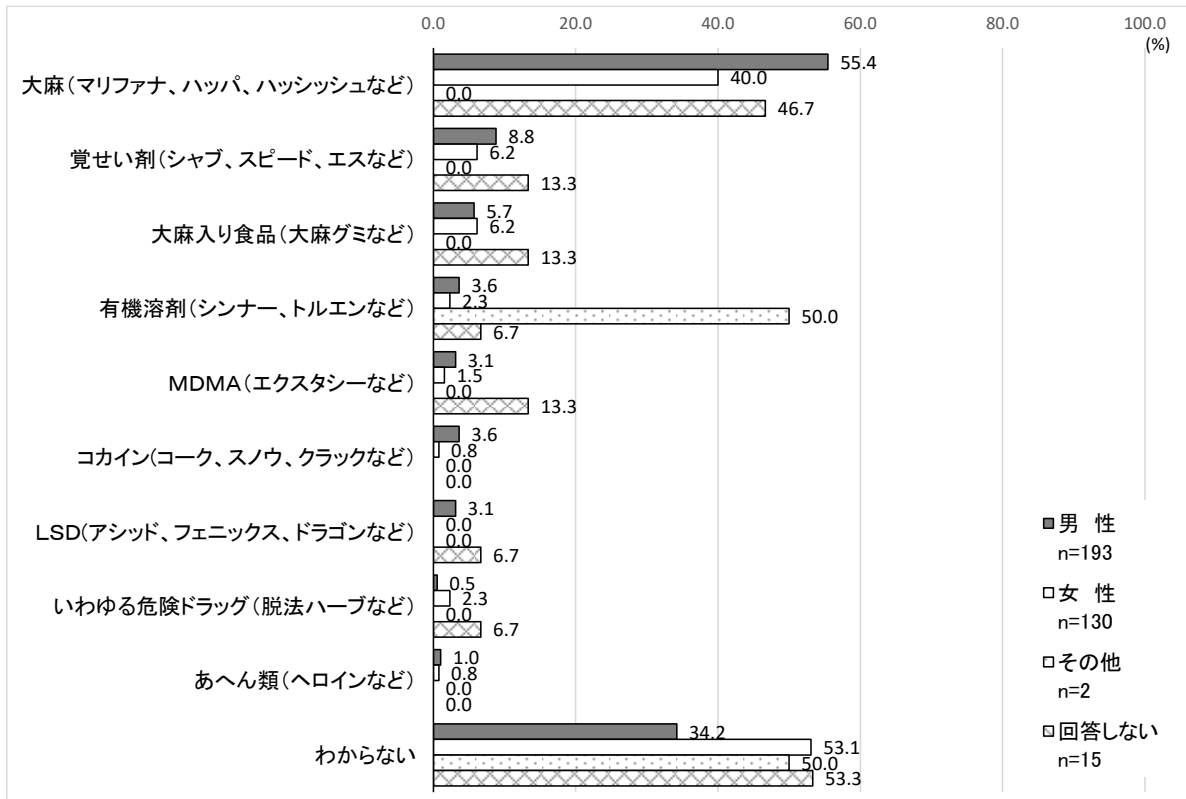
性別にみると、「男性」は、「大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシェなど）」と回答した割合が他より高く、「わからない」が低い。

図表 24 使用していた薬物

《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査		令和5年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	580		193		130		2		15		510		539	
有機溶剤(シンナー、トルエンなど)	22	3.8	7	3.6	3	2.3	1	50.0	1	6.7	35	6.9	49	9.1
覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)	49	8.4	17	8.8	8	6.2	0	0.0	2	13.3	58	11.4	62	11.5
大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシュシュなど)	299	51.6	107	55.4	52	40.0	0	0.0	7	46.7	240	47.1	266	49.4
コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)	18	3.1	7	3.6	1	0.8	0	0.0	0	0.0	14	2.7	27	5.0
あへん類(ヘロインなど)	4	0.7	2	1.0	1	0.8	0	0.0	0	0.0	5	1.0	9	1.7
LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)	11	1.9	6	3.1	0	0.0	0	0.0	1	6.7	16	3.1	19	3.5
MDMA(エクスタシーなど)	18	3.1	6	3.1	2	1.5	0	0.0	2	13.3	17	3.3	20	3.7
いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブなど)	8	1.4	1	0.5	3	2.3	0	0.0	1	6.7	24	4.7	27	5.0
大麻入り食品(大麻グミなど)	29	5.0	11	5.7	8	6.2	0	0.0	2	13.3	24	4.7	-	-
わからない	223	38.4	66	34.2	69	53.1	1	50.0	8	53.3	198	38.8	197	36.5
累計	681		230		147		2		24		631		676	

(19) 友人の薬物使用を知った場合の対応

問 18 あなたは、もし友人がこれらの薬物を使用していることを知った場合、どうしますか。(複数選択可)

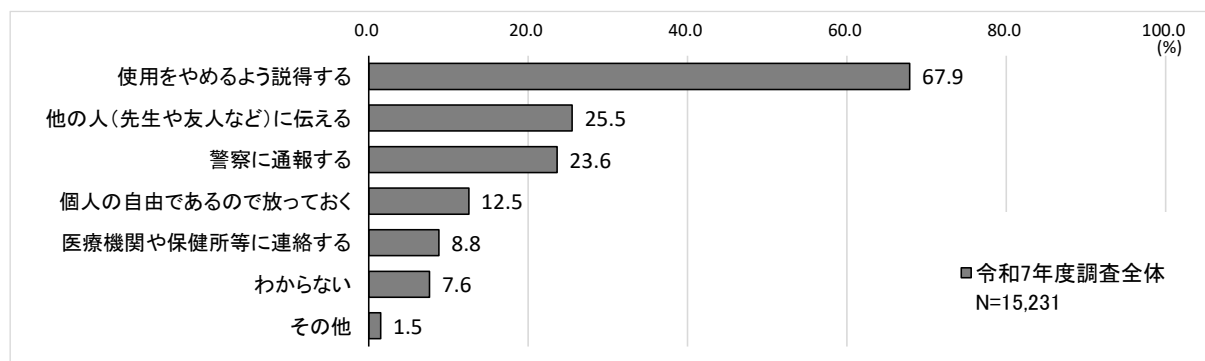
友人が質問 4 で提示した薬物を使用していることを知った場合の対応については、67.9%が「使用をやめるよう説得する」と回答した。次いで「他の人（先生や友人など）に伝える」が 25.5%、「警察に通報する」が 23.6%となっている。一方で、「個人の自由であるので放っておく」とした回答も 12.5%みられた。

過去の調査では、択一形式の設問であったため、今回の調査と単純な比較はできないが、「使用をやめるよう説得する」が最も高い割合を占めている点は同様である。

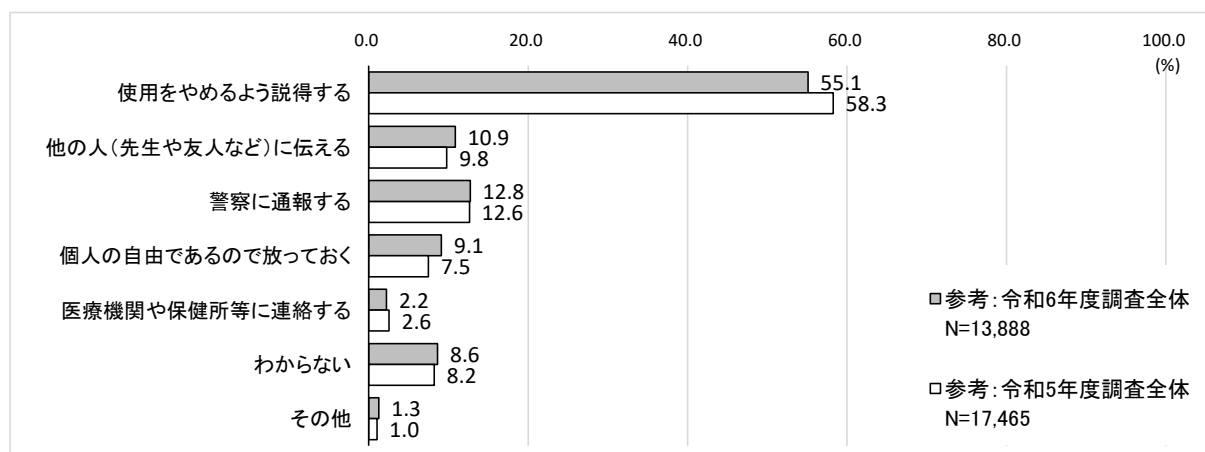
性別にみると、「女性」は、「個人の自由であるので放っておく」の割合が他に比べて低く、「他の人（先生や友人など）に伝える」と回答した割合が高かった。また、性別を「回答しない」とした人は、「使用をやめるよう説得する」と回答した割合が他より 10 ポイント以上低かった。

「その他」として記載された内容として、「縁を切る」、「関わらない・距離を置く」が全体の 7 割を占めた。一方で「話を聞く」、「止める」、「相談機関を勧める」、「自首を説得する」、「友人を助ける努力をする」といった、友人に寄り添う回答もみられた。

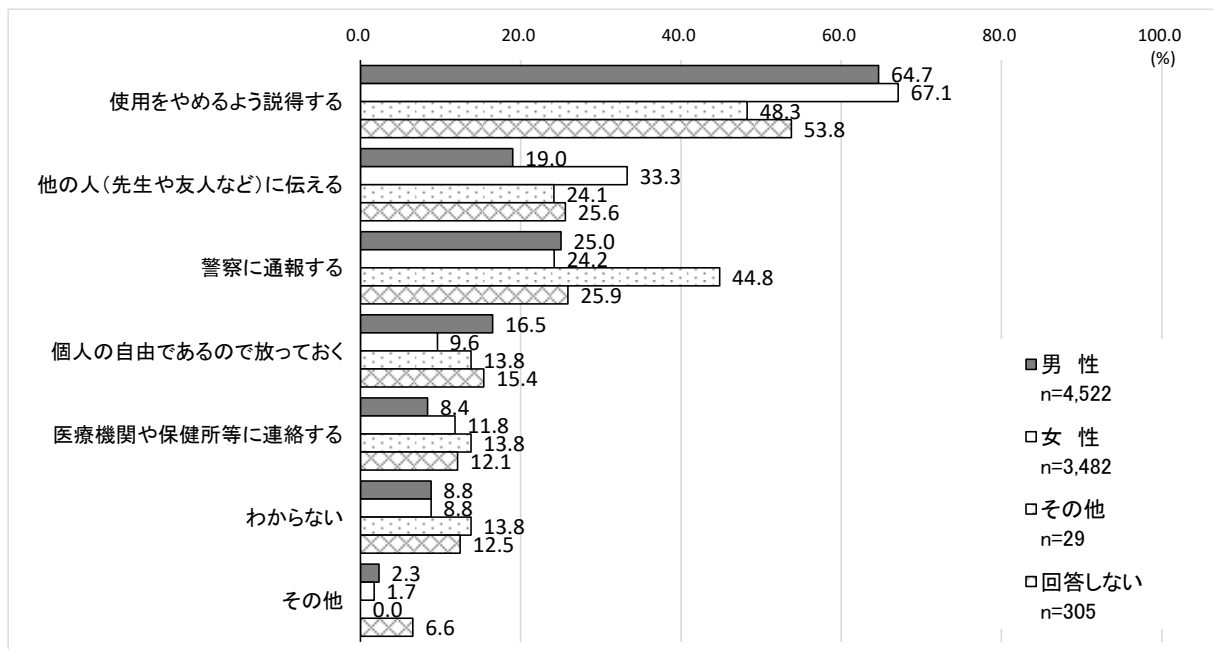
図表 25 友人の薬物使用を知った場合の対応



《参考：過去2年の調査》



《性別比較》



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								参考: 令和6年度調査全体		参考: 令和5年度調査全体	
	n	%	男性 n	%	女性 n	%	その他 n	%	回答しない n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
使用をやめるよう説得する	10,336	67.9	2,925	64.7	2,337	67.1	14	48.3	164	53.8	7,654	55.1	10,179	58.3
他の人（先生や友人など）に伝える	3,887	25.5	860	19.0	1,159	33.3	7	24.1	78	25.6	1,510	10.9	1,709	9.8
警察に通報する	3,599	23.6	1,132	25.0	842	24.2	13	44.8	79	25.9	1,772	12.8	2,207	12.6
医療機関や保健所等に連絡する	1,342	8.8	379	8.4	411	11.8	4	13.8	37	12.1	311	2.2	447	2.6
個人の自由であるので放っておく	1,911	12.5	746	16.5	335	9.6	4	13.8	47	15.4	1,267	9.1	1,308	7.5
わからない	1,161	7.6	399	8.8	307	8.8	4	13.8	38	12.5	1,198	8.6	1,435	8.2
その他	228	1.5	105	2.3	60	1.7	0	0.0	20	6.6	176	1.3	180	1.0
累計	22,464		6,546		5,451		46		463		631		676	

図表 26 その他の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
縁を切る	95	逃げる	1
関わらない・距離をおく	65	様子を見る	1
警察等に相談	9	茶化す	1
警察に通報	4	説得は無駄だ	1
話を聞く	11	検討する	1
友人を助ける努力をする	5	海外でも自分はいない	1
止める	4	海外の法律によって対応	1
相談機関を勧める	4	人による	1
自首を説得する	1	関係ない	1
違法であることを伝える	1	知らない	1
相手を殴る	7	特になし	1
何もしない・できない	8	その他	1
止めろという自信がない	1	無効	1

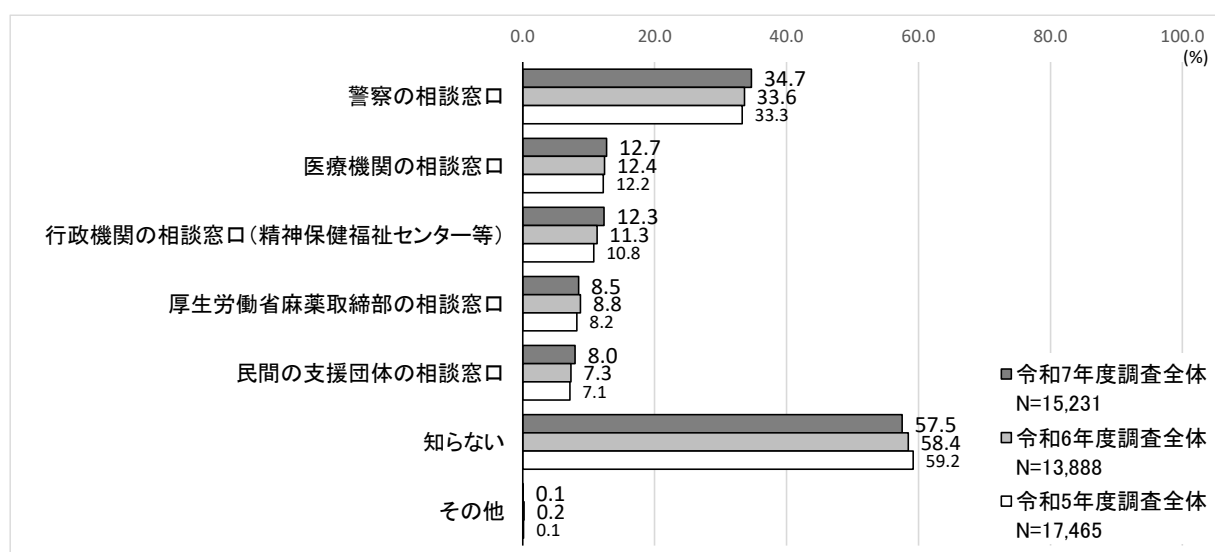
(20) 薬物に関する相談窓口の認知状況

問 19 あなたは、これらの薬物に関する相談窓口があることを知っていますか。(複数選択可)

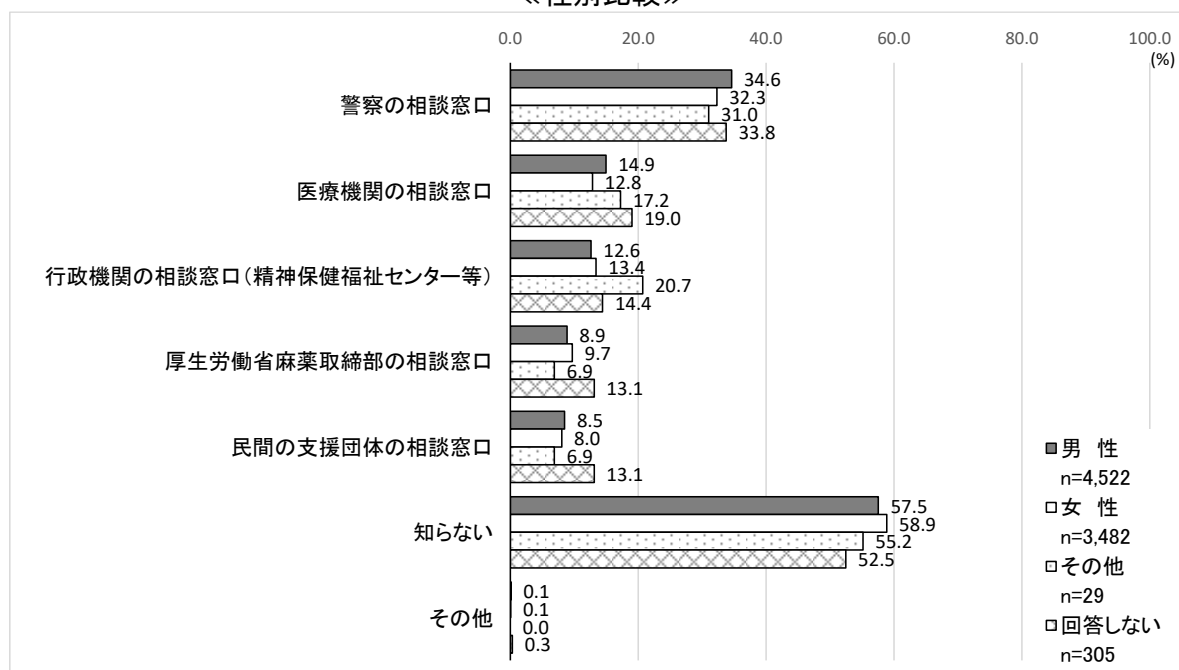
薬物に関する 5 つの相談窓口を提示し、その認知状況をたずねたところ、57.5%が「知らない」と回答している。相談窓口の中では「警察の相談窓口」が 34.7%と最も認知されている。続いて「医療機関の相談窓口」が 12.7%、「行政機関の相談窓口」が 12.3%、「厚生労働省麻薬取締部」が 8.5%、「民間の支援団体」が 8.0%である。

この傾向は、過去 2 年の調査と同様であり、性別による大きな差はみられない。

図表 27 薬物に関する相談窓口の認知状況
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								令和6年度調査 全体		令和5年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
警察の相談窓口	5,281	34.7	1,565	34.6	1,125	32.3	9	31.0	103	33.8	4,667	33.6	5,810	33.3
行政機関の相談窓口（精神保健福祉センター等）	1,879	12.3	571	12.6	467	13.4	6	20.7	44	14.4	1,565	11.3	1,883	10.8
厚生労働省麻薬取締部の相談窓口	1,289	8.5	401	8.9	338	9.7	2	6.9	40	13.1	1,217	8.8	1,434	8.2
医療機関の相談窓口	1,937	12.7	676	14.9	447	12.8	5	17.2	58	19.0	1,725	12.4	2,134	12.2
民間の支援団体の相談窓口	1,211	8.0	384	8.5	280	8.0	2	6.9	40	13.1	1,014	7.3	1,247	7.1
知らない	8,758	57.5	2,602	57.5	2,050	58.9	16	55.2	160	52.5	8,116	58.4	10,337	59.2
その他	10	0.1	5	0.1	2	0.1	0	0.0	1	0.3	27	0.2	25	0.1
累計	20,365		6,204		4,709		40		446		18,331		22,870	

図表 28 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数
あると思っていたが、実際には見ていない	2
大学に窓口があることは知っている	1
学校機関	1
ある事は知っているが、詳しくは知らない	1
調べたが名前などは知らない	1
どこでやっているか知らなかった	1
知らなかった	1
その他	2

(21) 薬物に手を出さないように注意するために知りたい情報

問 20 あなたや、あなたのまわりの人がこれらの薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は何か。（複数選択可）

まわりの人が質問 4 で提示した薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報に対する回答として、「薬物乱用による健康被害情報」が 61.1%と最も高く、次いで「薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報」が 46.1%、「国や地方公共団体の薬物乱用対策情報」が 16.2%、「医療機関や民間支援団体の取り組み情報」が 15.1%であった。

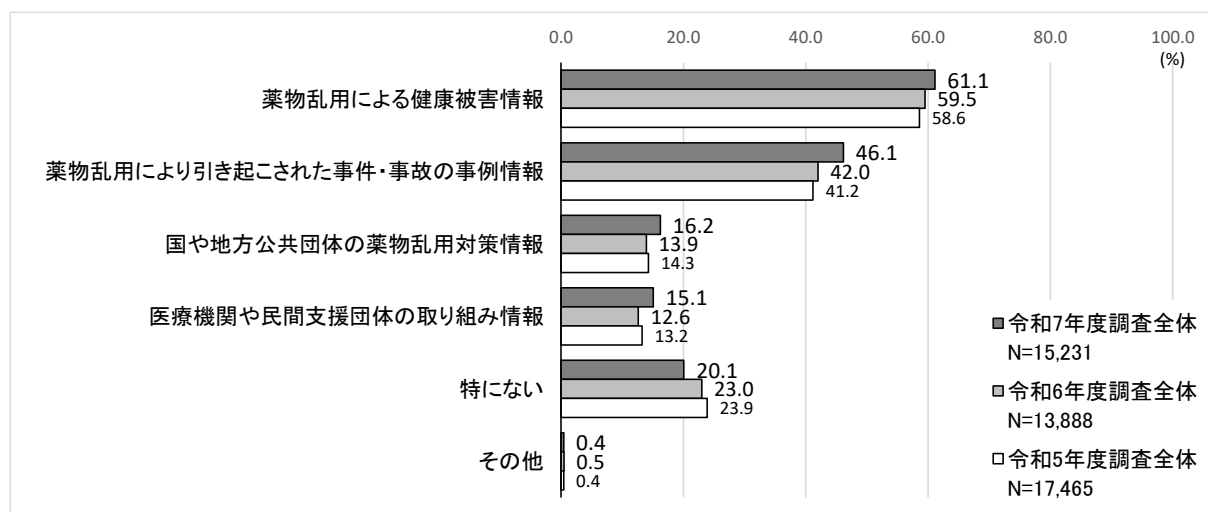
過去 2 年の調査においても同様の傾向となっている。

性別にみると、「女性」は、「薬物乱用による健康被害情報」と「薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報」の回答割合が、他に比べて高い。

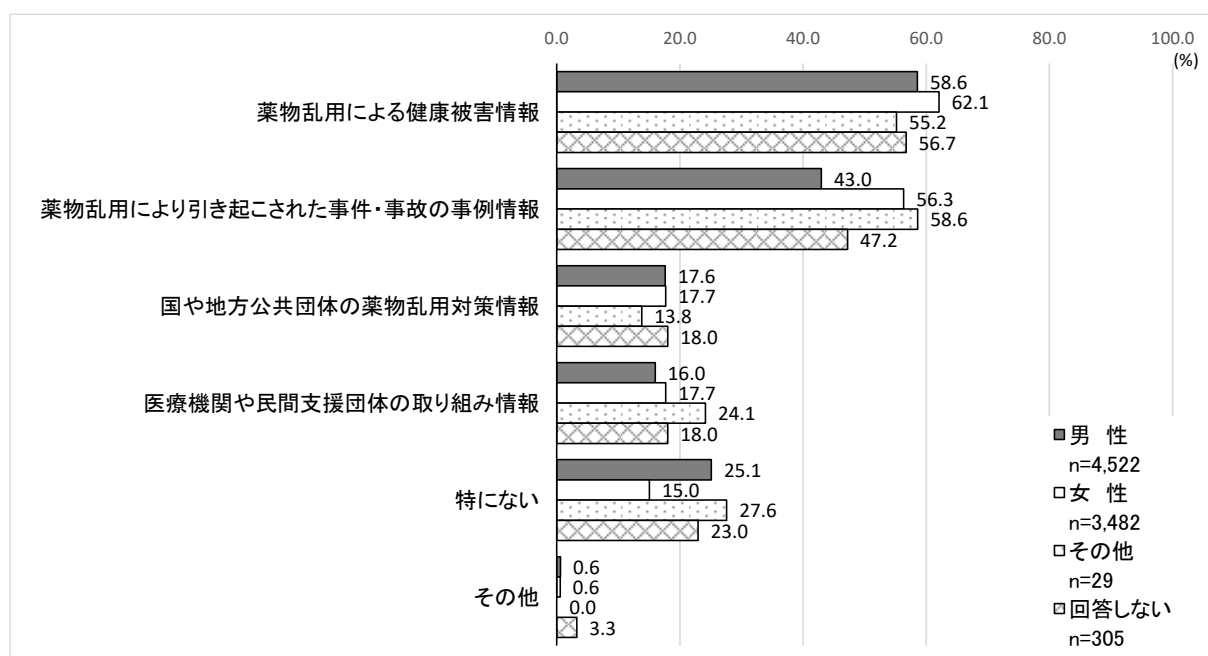
「その他」として記載された内容としては、「刑罰」や「薬物使用経験者の話」、薬物使用に関するさまざまな情報が挙げられている。また、誘惑を「回避・対応する方法」や「手口」など、具体的な対処法を知りたいという回答もみられた。

図表 29 薬物に手を出さないよう注意するために知りたい情報

《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査全体		令和5年度調査全体	
	n	%	男性 n	%	女性 n	%	その他 n	%	回答しない n	%	n	%	n	%
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305		13,888		17,465	
薬物乱用による健康被害情報	9,312	61.1	2,648	58.6	2,161	62.1	16	55.2	173	56.7	8,264	59.5	10,232	58.6
薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報	7,028	46.1	1,944	43.0	1,961	56.3	17	58.6	144	47.2	5,833	42.0	7,193	41.2
国や地方公共団体の薬物乱用対策情報	2,470	16.2	797	17.6	616	17.7	4	13.8	55	18.0	1,937	13.9	2,495	14.3
医療機関や民間支援団体の取り組み情報	2,298	15.1	723	16.0	617	17.7	7	24.1	55	18.0	1,752	12.6	2,314	13.2
特にない	3,057	20.1	1,136	25.1	524	15.0	8	27.6	70	23.0	3,194	23.0	4,172	23.9
その他	68	0.4	28	0.6	20	0.6	0	0.0	10	3.3	66	0.5	74	0.4
累計	24,233		7,276		5,899		52		507		21,046		26,480	

図表 30 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
刑罰	7	薬物中毒の現状	1
回避・対応法	7	使用に至る背景	1
誘惑の手口	6	逮捕後の処遇	1
薬物使用経験者の話	5	隠語	1
薬物使用・乱用を食い止める方法	5	流通元の情報・取り締まり状況	1
薬物使用経験者の状況・事例	4	社会情勢の改善	1
薬物の功罪・心身へのデメリット	3	コストパフォーマンス	1
薬物経験者のその後	3	SNS での動画	1
薬物に関する法律・違法性	3	有名人による啓発	1
薬物使用者への説得方法	2	実名報道	1
周囲の精神的サポート	2	薬物乱用や依存に関する書籍情報	1
(スポーツ・趣味等の)ストレス解消法	2	海外で合法な理由	1
メンタルケア・相談ができる施設	1	わからない	1
やめさせたい人に寄り添った情報	1	その他	2
見抜く力	1	無効	1

(22) 薬物入手の可能性と可能な理由

問 21(ア) あなたは、これらの薬物を入手することが可能ですか。(1 つ選択)
 質問 21(ア)で「難しいが手に入る」または「手に入る」を選択した人だけお答えください。

(イ) 入手可能と考えた理由は何ですか。(複数選択可)
 質問 21(ア)で「それ以外」を選択した人だけお答えください。

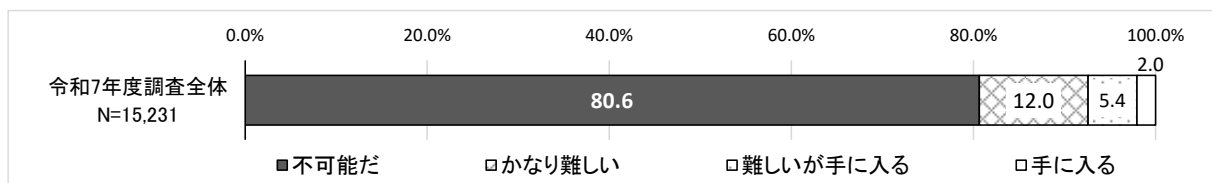
(ウ) それ以外に入手可能と考えた理由は何ですか。

質問 4 で提示した薬物の入手の可能性については、80.6%が「不可能だ」と回答した。一方、「手に入る」は 2.0%、「難しいが手に入る」が 5.4%であった。

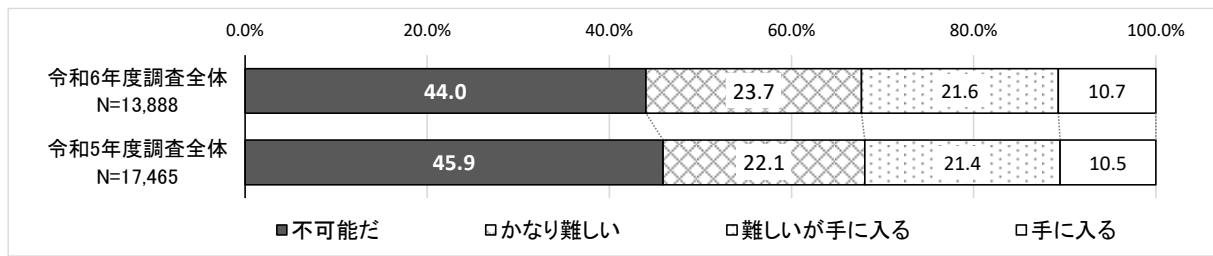
なお、過去の調査においては「入手可能と考えるか」といった設問であったため、今回の調査と単純な比較はできないが、「難しいが手に入る」「かなり難しい」と考える人がそれぞれ 2 割程度存在していた。しかし、今回の調査では、「入手することが可能か」と問うた結果、「不可能である」とする回答が大半となっている。

性別にみると、「不可能だ」とする割合は、「女性」が他に比べて高い。

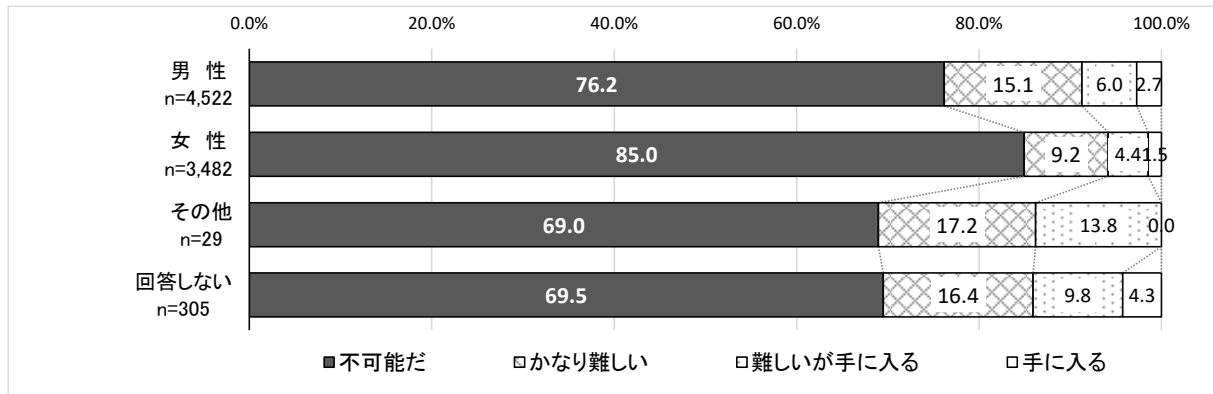
図表 31 薬物入手の可能性



《参考：過去調査》



《性別比較》



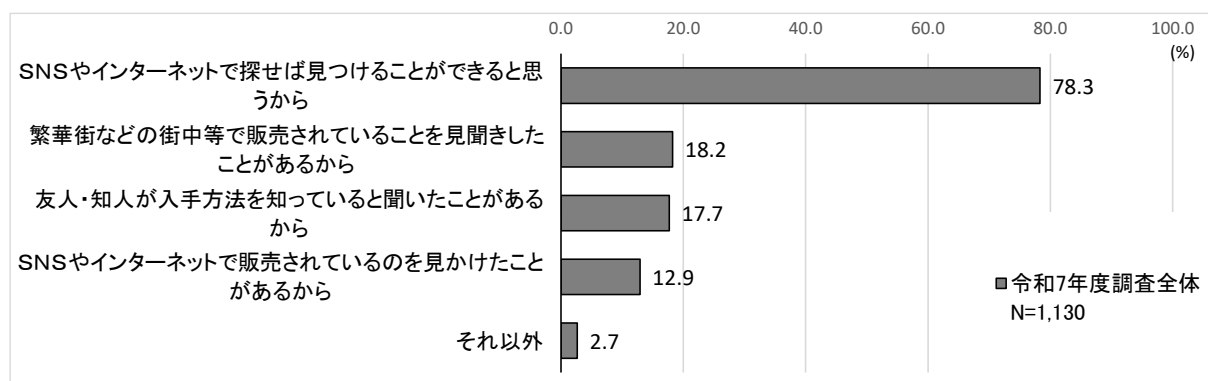
	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								参考			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	令和6年度調査 n	%	令和5年度調査 n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
不可能だ	12,280	80.6	3,445	76.2	2,958	85.0	20	69.0	212	69.5	6,112	44.0	8,018	45.9
かなり難しい	1,821	12.0	683	15.1	320	9.2	5	17.2	50	16.4	3,288	23.7	3,867	22.1
難しいが手に入る	820	5.4	271	6.0	153	4.4	4	13.8	30	9.8	3,000	21.6	3,745	21.4
手に入る	310	2.0	123	2.7	51	1.5	0	0.0	13	4.3	1,488	10.7	1,835	10.5

「手に入る（「難しいが手に入る」と「手に入る」の合計）」と回答した理由として、78.3%が「SNS やインターネットで探せば見つけることができるから」としている。「繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから」が18.2%、「友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから」が17.7%、「SNS やインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」が12.9%となっている。

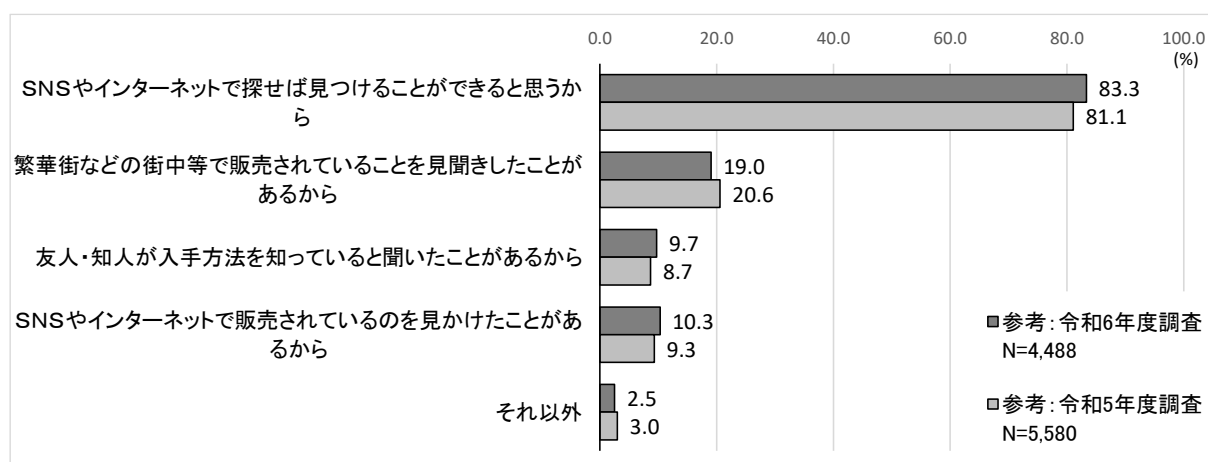
過去の調査では、「入手可能と考えるか」という設問に対し、「手に入る（「難しいが手に入る」と「手に入る」の合計）」と回答していることから、今回の調査と単純な比較はできないが、「SNS やインターネットで探せば見つけることができるから」とした人が大半を占めている点は共通している。

性別にみると、「男性」は、「友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから」の割合が他よりも高かった。一方、「女性」と性別を「回答しない」とした人では、「SNS やインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」と回答した割合が「男性」より高かった。

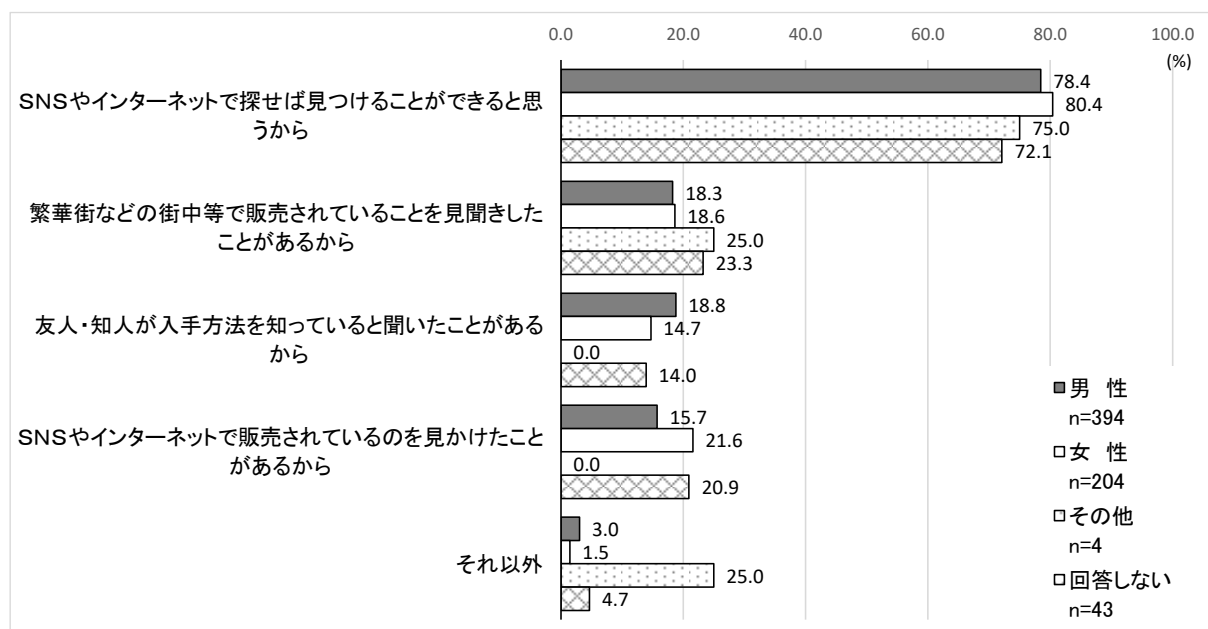
図表 32 薬物入手が可能性と考えた理由



《参考：過去調査》



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)								参考			
			男性		女性		その他		回答しない		令和6年度調査		令和5年度調査	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	1,130		394		204		4		43		4,488		5,580	
SNSやインターネットで探せば見つけることができると思うから	885	78.3	309	78.4	164	80.4	3	75.0	31	72.1	3,740	83.3	4,524	81.1
SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから	146	12.9	62	15.7	44	21.6	0	0.0	9	20.9	462	10.3	519	9.3
友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから	200	17.7	74	18.8	30	14.7	0	0.0	6	14.0	436	9.7	484	8.7
繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから	206	18.2	72	18.3	38	18.6	1	25.0	10	23.3	854	19.0	1,148	20.6
それ以外	30	2.7	12	3.0	3	1.5	1	25.0	2	4.7	113	2.5	166	3.0
累計	1,467		529		279		5		58		5,605		6,841	

「それ以外」に入手可能と考えた理由として、シンナーや類似品等や海外で「入手できる」という回答が複数あり、具体的に売人やウェブを知っている人もいる。

図表 33 選択肢以外に入手可能と考えた理由の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
シンナー等入手できるものがある	5	市販薬の大量摂取	1
海外で入手できる	4	怪しいメールがくる	1
自分で製造できる	3	ダークウェブで販売	1
薬局で(類似品を)買える	3	売人を知っている	1
流通している場がある	3	持っている	1
医療用に使用されているものあり	2	大学のオリエンテーションで習った	1
身近にあると思う	2	ニュースの情報	1
		無効	1

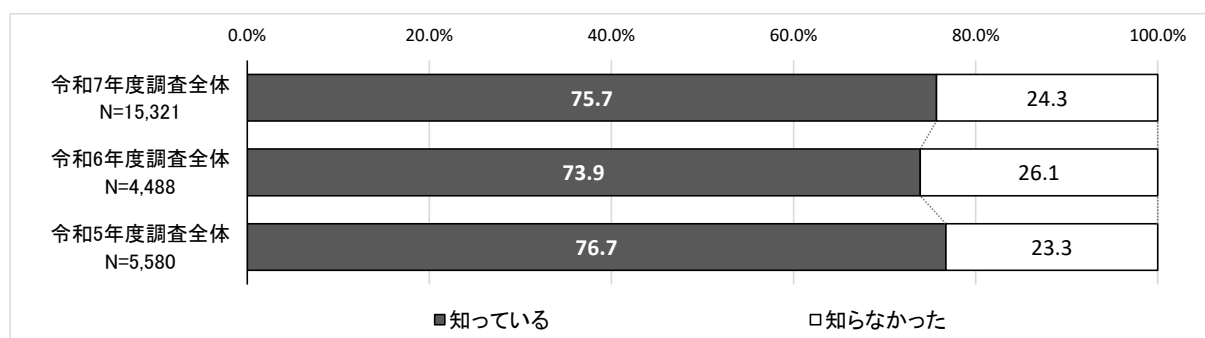
(23) 医薬品医療機器等法に基づく処罰の認知状況

問 22 あなたは、医薬品医療機器等法により、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッドなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となる薬物になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

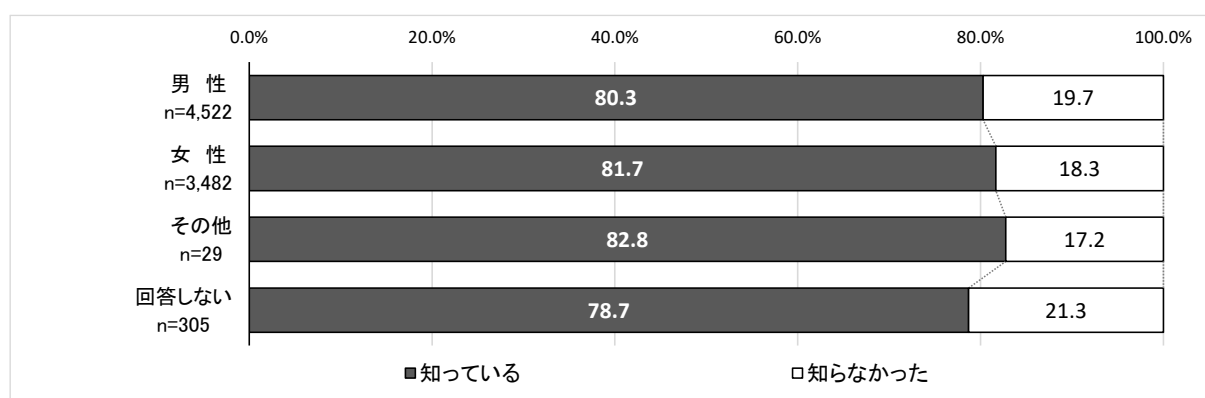
医薬品医療機器等法に基づき、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッドなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となることの認知状況については、75.7%が「知っている」と回答した一方、24.3%は「知らなかった」として

いる。
なお、この傾向は、過去2年の調査と概ね同様となっており、性別による差はみられない。

図表 34 医薬品医療機器等法に基づく処罰の認知状況
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査全体		令和5年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0	17,465	100.0
知っている	11,532	75.7	3,630	80.3	2,844	81.7	24	82.8	240	78.7	10,265	73.9	13,402	76.7
知らなかった	3,699	24.3	892	19.7	638	18.3	5	17.2	65	21.3	3,623	26.1	4,063	23.3

(24) 市販薬の過剰摂取も薬物乱用の一種であることの認知状況

問 23 あなたは、「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」が社会問題になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

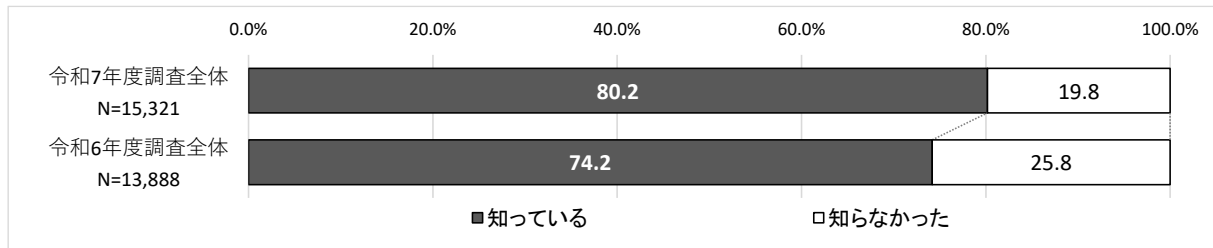
「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」とは、市販薬（かぜ薬・解熱剤・鎮痛剤・睡眠薬など）を定められた用法・用量以上に服用する（過剰摂取する）ことで、薬物への依存が高まるだけでなく、内臓機能障害や最悪の場合は心肺停止で死亡するケースもある、薬物乱用の一種です。

「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」が社会問題になっていることの認知状況については、80.2%が「知っている」、19.8%が「知らなかった」と回答した。

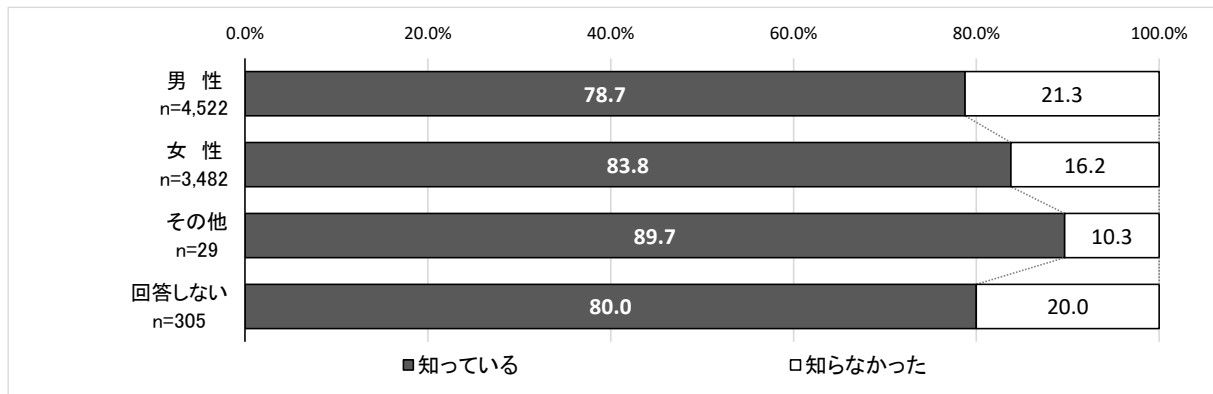
昨年度の調査と比較すると、「知っている」の回答割合は高くなっている。

また、性別にみると、「女性」および性別を「回答しない」とした人の方が、「男性」よりも「知っている」と回答した割合が高い。

図表 35 市販薬の過剰摂取に関する認知状況
 <<過年度調査比較>>



<<性別比較>>



	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=8,338)								令和6年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	15,231	100.0	4,522	100.0	3,482	100.0	29	100.0	305	100.0	13,888	100.0
知っている	12,211	80.2	3,561	78.7	2,917	83.8	26	89.7	244	80.0	10,301	74.2
知らなかった	3,020	19.8	961	21.3	565	16.2	3	10.3	61	20.0	3,587	25.8

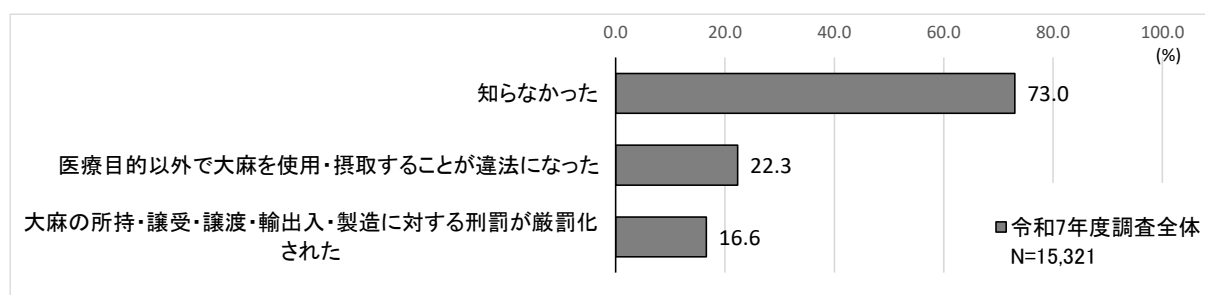
(25) 「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」の認知状況

問 24 2023 年 12 月に「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」が成立し、2024 年 12 月 12 日にその一部が施行されていますが、あなたはこの試行内容について知っていますか。(複数選択可)

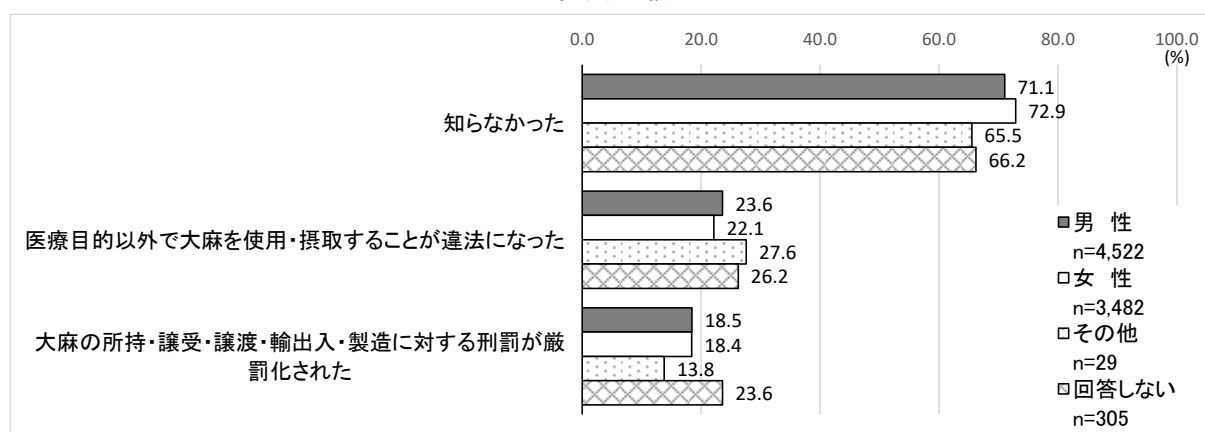
「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」の一部改正、一部施行の認知状況については、73.0%が「知らなかった」と回答している。次いで「医療目的以外で大麻を使用・摂取することが違法になった」が 22.3%、「大麻の所持・譲受・譲渡・輸出入・製造に対する刑罰が厳罰化された」が 16.6%となっている。

性別にみると、性別を「回答しない」とした人は、他に比べて「知らなかった」の割合が低い。

図表 36 「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」の認知状況



《性別比較》



(設問順)

	令和7年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=8,338)							
	n	%	男性		女性		その他		回答しない	
回答者数	15,231		4,522		3,482		29		305	
医療目的以外で大麻を使用・摂取することが違法になった	3,400	22.3	1,067	23.6	771	22.1	8	27.6	80	26.2
大麻の所持・譲受・譲渡・輸出入・製造に対する刑罰が厳罰化された	2,527	16.6	835	18.5	641	18.4	4	13.8	72	23.6
知らなかった	11,117	73.0	3,213	71.1	2,538	72.9	19	65.5	202	66.2
累計	17,044		5,115		3,950		31		354	

4. 調査結果を踏まえた今後の方向性について

<調査結果を踏まえた構成員からの意見集約>

1. 薬物意識・現状認識に関する共通点

- ・薬物が身近に存在する現実
 - ▶複数大学で「使用者を見たことがある」「勧められた経験がある」との回答が指摘され、危機感を共有。
 - ▶入手経路に関して「友人・知人」「SNS」など、学生にとってハードルが低下している傾向（関西大）。
- ・教育効果の蓄積
 - ▶中学校・高校での教育による知識定着は認められる（大阪公立大・大阪国際大）。
 - ▶但し、大学入学後の継続啓発の必要性が強調されている。

2. 課題の抽出

（1）回答率の向上

- ・回答率が全体的に低調であり、依頼ベースでは限界がある（大阪公立大・大阪電気通信大）。
- ・工夫例として：
 - ▶ガイダンスや入学式時に QR コードを提示（大阪経済大）。
 - ▶大学独自アプリで回答促進（追手門学院大）。
 - ▶「既に〇%が回答」と進捗を示す方法の有効性について指摘（近畿大）。
 - ▶入学式・オリエンテーション等でチラシ配布やメール周知（大阪体育大）。
- ・回答率向上の仕組み化が共通課題。

（2）啓発方法の工夫

- ・従来型のポスター掲示は効果に疑問（相愛大）。
- ・ICT 活用の拡大：
 - ▶デジタルサイネージ（大阪国際大・大阪経済大）。
 - ▶動画教材の導入（近畿大）。
 - ▶ポータルサイト活用（大阪観光大・羽衣国際大）。
- ・学生の接触機会に即した多様な媒体の活用が求められる。

（3）特殊な状況への対応

- ・留学生比率が高い大学での啓発課題（大阪観光大）。
- ・「合法／違法」の判断の難しさによる誤使用事例（相愛大）。
- ・学生の無関心層・肯定的意識層への対応（桃山学院大）。

3. プラットフォームに期待される取組

- ・共同啓発活動の推進
 - ▶各大学単独では難しい取組を広域で実施し、社会的影響力を高める（大阪学院大）。
 - ▶大学間・地域・行政・警察との連携強化（大阪教育大・帝塚山学院大）。
- ・情報共有の仕組み
 - ▶各大学の好事例や取組内容をプラットフォーム内で共有（大阪工業大・桃山学院大）。
 - ▶学生が結果を“自分事化”できるように、動画等を使ったわかりやすい発信（大阪体育大）。
- ・教育・研修的アプローチ
 - ▶学生が「誘われたときに断れる」行動力を養う教育（藍野大・大阪公立大）。
 - ▶継続的な調査実施と経年比較による効果検証（大阪医科薬科大・大阪国際大）。

4. 各大学の特徴的取組（例示）

区分	主な取組事例	該当大学
ガイダンス活用	・新入生ガイダンス時の資料配布・説明 ・交通ルール講習会に薬物防止講習会を組込み	・藍野大、大阪医科薬科大、大阪観光大 ほか ・大阪体育大
デジタル活用	動画・アプリ・デジタルサイネージによる啓発	大阪経済大、追手門学院大、近畿大、大阪国際大
地域・外部連携	警察・保健所・自治体と連携した啓発	大阪学院大、大阪医科薬科大
教職員向け取組	SD 研修で外部講師招へい	帝塚山学院大
学生組織を活用	クラブ顧問・部活動会での注意喚起	大阪国際大
啓発媒体の工夫	標語募集・ポスター掲示	大阪体育大

5. 今後の分析視点

- （１）回答率向上のための施策比較
 - 必須化の可能性、ICT ツール、進捗提示の効果など
- （２）啓発手法の効果検証
 - ポスター・講演・動画・SNS 発信など、媒体別の実効性評価
- （３）リスク認知から行動抑止への橋渡し
 - 知識がある学生が「断れる」行動につながる条件の分析
- （４）学生層ごとのニーズ対応
 - 留学生層・肯定的無関心層・学部特性など
- （５）分析切り口の拡充（性別比較に加え、属性や行動特性別の詳細分析）

詳細は別紙「大学別意見一覧（ローデータ）」を参照。

2025（令和7）年度「新入生対象 薬物に関する意識調査」結果を踏まえた意見（大学別意見一覧）

NO.	大学名	本年度の所見	今後、学生の薬物乱用防止に向けて、プラットフォームへの期待	回答促進の工夫・課題	薬物乱用防止啓発に関する 自大学の取組	その他
1	大阪教育大学	社会問題化する中で、大学としてどういうことを成すべきかの参考となる。	サークル活動を通じて大学間の学生のつながりが深まる中、協力して薬物乱用防止の啓発活動を強化できるようになることを期待します。	担当部署において強い周知が出来ていないようで申し訳ありません。次回はリマインドも含めて対応いたします。	学生生活指導において、違法薬物に関する啓発と学内外の相談窓口を周知している。	
2	大阪公立大学	・回答結果からは、大学入学以前の教育課程で、薬物の種類や危険性、処罰について等は大多数が適切な知識を得る事ができていると感じます。また、周囲や友人に使用している人がある、入手も不可能ではない、という回答が少数ながらも見られる事が、大学生という時期を象徴しているように感じます。 ・例年のごとく大学ごとに回答のばらつきがあるので、何か是正できる方法を付帯的に考えていかなければいけないと感じました。回答率が全体学生数に対して非常に低い状況であり、各大学に依頼レベルでは中々回答率を上げることに繋がっておらず、大阪府の大学全体が均一に意識付けできる、効果的なアプローチ方法や、要回答になるような仕組みを構築することが望ましく、より啓発につながるのではないかと考えました。	周囲や友人が薬物を使用している時や、勧められた時等の対処法の具体的な教育の実施、また学生の薬物に関して考える機会をつくることで学生の意識が向上すると考えています。継続的な啓発にむずびつくアンケート調査を実施していくことが良いと感じます。	学内ツールを利用し、回答の促進を促しています。また各キャンパスでチラシを掲示しており、広く知れ渡りますが任意回答としているため、回答率の向上が課題となっています。	学生生活オリエンテーション動画を作成し、新入生向けの案内ツール内で視聴するよう指導しています。	継続的にこのアンケートを実施していくことが重要だと思います。継続して活動されることを期待いたします。
3	藍野大学	個々の薬物意識は、今までの学習経験や目にする媒体を通して高いが、他者が係ること、どこまで自分の信念をもって対応すること大事と感じ、行動するかどうかが重要であると感じました。	他者からの薬物誘惑時の対応などについて	登校初日の新入生ガイダンス時に配布して説明しているが、学生は他の手続きもあり、すべきこと多く、時間の確保が課題だと感じています。	新入生ガイダンス時に、薬物乱用防止啓発資料の配付・説明をしています。また、学期毎にガイダンスを行い、学生生活についての注意喚起の用紙を作成して、配付・説明を行っています。	
4	追手門学院大学	過去2か年に比べて薬物に対する意識や情報量があがっていることに比例し、勧誘された経験も微増していることから、危険薬物が更に身近なものとなっていることがわかる。	引き続き本調査を通じて薬物乱用防止の啓発活動を続けていくことを期待する。	大学独自のアプリを使い、回答を促している。	薬物乱用防止セミナー・薬物防止講習会（警察署協力）	
5	大阪医科薬科大学	「（22）薬物入手の可能性と可能な理由」において、過去調査と比較して「不可能だ」の割合が急激に増加している要因について知りたい。	本調査を行った学年に対して、数年後、薬物に関する意識の経年比較ができる調査を実施しても良いのではないかとと思う。	新入生ガイダンス時にチラシを配付し、周知・案内をしている。	毎年、1・3・5年次生向けに薬物乱用防止啓発の講演会を実施している。新入生にはガイダンス時に薬物乱用防止のリーフレット等を配布している。近隣保健所から、薬物乱用防止キャンペーン等の参加依頼があれば、全学生へ周知して参加者を募っている。	

NO.	大学名	本年度の所見	今後、学生の薬物乱用防止に向けて、プラットフォームへの期待	回答促進の工夫・課題	薬物乱用防止啓発に関する 自大学の取組	その他
6	大阪学院大学	学生にこの意識調査に触れてもらうことで、薬物に対して無知な状態やトラブлや自らの健康被害などから状況を变えていくことの助けになっていると感じている。	単独大学だけの取り組みではなく、プラットフォームでの取り組みは大阪の各大学の取り組みとして一丸のとなつて社会への影響を持つことができるため、いずれの取り組みも意義は大さいと感じている。ついでには薬物に関しても正しい知識を持ち、決して近づくことが無いように学生を導く取り組みが期待されていると感じる。	これまでの方法から一転しダイレクトに学生個々に回答を依頼する取り組みにより一気に回答数が増えた。学生の主体性に任せるべき事項と積極的にアプローチするべきことの切り分けの重要性を改めて感じられた。	吹田市および吹田警察と連携して薬物乱用防止啓発活動を行っている。また学部学生課が中心となり、オリエンテーション時や各部活動団体の連絡会など学生が集まるタイミングで必要に応じて薬物乱用防止啓発活動を行っている。	
7	大阪観光大学	本学において薬物乱用防止に向けての啓発活動において非常に参考となりました。本学においては留学生の割合が高く、入学受入後の啓発の参考にもなります。	今後も分科会等を通して情報共有を行い、プラットフォームにおいての情報共有、啓発活動の推進。	・授業終了時等にアンケート回答への協力依頼の案内を行う。	・新入生オリエンテーションの場において、対面にてリーフレットの配布と注意喚起。 ・ポータルサイトにおいて薬物乱用防止啓発の発信。	
8	大阪経済大学	・本学の回答者数が少し減ってしまった。 ・今月初めてこの調査報告を拝見したが、問17で周りに薬物を所持したり、使用している人が100人当たり3人以上いることが衝撃だった。こんなにも若い世代が薬物に手を出しているという事実が単純にショックだった。	注意喚起用の動画提供（ポータルサイトやデジタルサイネージで流す用として）	ほぼ全員が参加する入学式後の書類受領時の座席表に当該アンケートへのQRコードを記載し、待ち時間に回答できるようにしている。		
9	大阪工業大学	大学生にとって想像以上に薬物が身近であると感じる	各大学（匿名）における事例（対応）や啓発活動の内容の照会	調査の意義や必要性を示しづらい点が課題	年に一度、課外活動団体に向けた啓発セミナーを実施している	
10	大阪国際大学	「薬物使用時の症状に関する認知状況」について、問8から過去2年の調査と比較すると、傾向は概ね同様であるものの、全体としては昨年度よりも症状を認知している割合がやや高くなっている。この要因として、問9に示す「薬物についての情報源」をみると、9割近くが中学校・高校で情報を得ており、小学校の授業でも64.9%と上位に欠いて高く、これらの初等中等教育機関の活動が功を奏しているのではないかと考える。また、問10からは、「薬物の怖さについての更なる学習」について、過去2年の調査を踏まえると、更なる学習の必要性を望んでいることが窺い知ることができ、学ぶ場の選択肢として、「大学（講演会、ビデオ、リーフレット）」への要望が過去3年間の調査でも最上位に来ていることから、学生が薬物に手を出さないように未然に防ぐためにも、初等中等教育機関と接続するような形で、大学での継続的な啓発が必要なのではないかと考える。	今回の集計・分析をもとに、薬物に関する危機意識の醸成を促すとともに、特に連絡先の周知活動等を行うことで、相談先が分からないという現状に対する改善の取組を実施することができれば、学生の薬物乱用防止の一助になり得るため、そういった取組に期待したいと考える。	今年度、本学の1年次生を担当する部門に協力をお願いすることで、少しではあるが回答者数の増加につなげることができた。次年度に向けては、学生課とともに連携することで、アンケート回収率の向上に寄与できるように尽力したいと考える。	本学の薬物乱用防止啓発に関する取組としては、①デジタルサイネージを含めた掲示での啓発、②体育会、文化会クラブ顧問・副顧問、主将を介してのクラブ学生への注意喚起、③全学生に対してUNIPAによる注意喚起を行っている。	
11	大阪女学院大学	薬物をしようしている者を見たことがあると回答する学生がいることに危機感を感じています。我々、大人が思っている以上に、身近に薬物があることが読み取れます。			本調査への協力を学生にする際に、薬物の危険性を説明することとしています。	

NO.	大学名	本年度の所見	今後、学生の薬物乱用防止に向けて、プラットフォームへの期待	回答促進の工夫・課題	薬物乱用防止啓発に関する 自大学の取組	その他
12	大阪電気通信大学	「(15) 薬物使用の現場に居合わせたことの有無」において、「ある」と回答した割合が10%前後での推移が継続している点から、新入生にとって薬物が身近に存在している状態であると考えられる。そういった状況下であること踏まえ、今年度より実施予定の本調査結果を用いた研究等から、学生に対して大学としてどういったアプローチが効果的であるかの検討が今後必要と考えている。	今年度より実施予定の研究結果も踏まえながら、学生の薬物使用防止に向けた取組の検討を進めていただきたい。	回答率が低い点が課題と考えている。	学内掲示板へのポスター掲示	
13	大阪体育大学	・公開用の集計結果は性別比較を軸として分かりやすくまとめていただいています。可能であれば今後、地域差や偏差値層などに着目し集計・分析するとより深い情報を得ることができるのではないのでしょうか。 ・質問20、質問23について、近年「トー横界隈」「トー横キッズ」「オーバードーズ」などの単語をSNSで見かける機会が多くなりました。薬物情報に触れる機会が多くなり若者の薬物へのハードルが少し下がっているように思えます。今まで以上に「なぜ薬物を使ってはいけないか」の理由付けまでしっかりおこなっていく必要性を感じます。	学生が報告内容を見るときに、いかに自分事化できるかが大事だと思います。結果報告を動画に分かりやすくまとめたり、「大阪の大学へいこう」巻頭企画CROSS TALKのような企画に昇華したりしていただくと学生がとっつきやすいものになるのではないかなと考えています。	入学式・オリエンテーション等で、チラシを配布することやメールでの周知 ・交通ルール講習会の際に薬物乱用防止講習会 ・薬物乱用防止キャンペーンの標語募集し、ポスターとして掲示		
14	関西大学	過年度から引き続き、大学ごとの回答者数に偏りがあると考え。 今年度の調査結果については、おおむね昨年度と同程度の水準で推移しているが、薬物入手が可能な理由を問う設問【質問21（イ）】で、昨年度と比較し、「友人・知人が入手方法を知っている」と聞いたことがあるから」が8ポイント増加、「SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」が2.6ポイント増加しており、学生にとって薬物入手のハードルが下がってきている状況にあることがわかる。引き続き、薬物乱用防止の啓発活動が重要であると考え。	本調査結果を踏まえて、プラットフォーム全体で同課題に対する啓発取組の実施などを期待したい。			
15	近畿大学	アンケート調査期間の途中段階での本学の回答数を確認したい。		アンケート調査期間の途中段階で、本学の学生の回答率を把握できない点が課題と考えます。学生にリマインドする際に、「すでに〇%の方が回答しています」という文言を加えることで、未回答の学生に「自分もやらないといけない」という意識を持たせることができ、回答率の向上に繋がると考えます。	薬物乱用防止ポスターの掲示やリーフレットの設置、新入生オリエンテーションや近大ゼミで薬物についての注意喚起及び大学で作成した薬物乱用の動画を案内しています。 https://www.kindai.ac.jp/student-affairs/campus-life-movie/	
16	摂南大学	調査結果を見るに、本学の学生にも薬物に対する正しい知識や防衛意識が不足している者がいる可能性があることを認識しました。友人から誘いを受けて薬物を始めるケースがあることから、大学という場所・コミュニティが悪用されないようにも対策を講じる必要性を感じた。				

NO.	大学名	本年度の所見	今後、学生の薬物乱用防止に向けて、プラットフォームへの期待	回答促進の工夫・課題	薬物乱用防止啓発に関する 自大学の取組	その他
17	相愛大学	薬物であるのか否かの判断が難しくなっているように感じられる。本学においても合法と思い気軽に入手したものが違法薬物にあたるものであり、学生本人も「どこで判断すれば良いのかわからなかった」と述べるケースがあった。啓発ポスターの掲示などは行っているものの、近年紙の掲示に効果は期待できない。 違法薬物に限らず、学生へ啓発する情報発信（マンガなどを利用した取つきやすく、わかりやすい内容）が定期待便のように、届く仕組みがあれば活用したいと感じる。	上記の通り、違法薬物に限らず、学生へ啓発する情報発信（マンガなどを利用した取つきやすく、わかりやすい内容）が定期待便のように、届く仕組みが作り。	ポータルシステムによる回答依頼	学内の掲示、ポータルシステムの掲示	大変ためになる結果を頂戴しました。学内で活用してまいりたいと思います。ありがとうございます。
18	帝塚山学院大学	薬物の危険性については多くの学生が理解していることが調査からわかるが、それでも薬物を使用してしまう学生が少なくないことに問題の深刻さを感じています。	学生に対して確実に情報が届く仕組みを充実させるために、大学と行政等の関係諸団体とを結ぶ役割を期待しています。	ガイダンス等で調査について周知を図りましたが、特別なことは行っておりません。	教職員のSD研修として、大阪府健康医療部の担当者の方に薬物乱用防止に関するご講演をいただきました。	
19	羽衣国際大学	学生が犯罪に巻き込まれることを防ぐためにも、意義のある調査であると思います。また、様々な薬物名を知っている学生が多いことに、驚きました。アンケート回答から、私達が思っている以上に、学生は危機意識を持っているようにも感じました。	現行の調査を続けていただければ有難いと考えております。	Webポータルで全学生に告知しているが、まだまだ回答者数が少ない。	入学直後の新入生全員を集めた学生生活ガイダンスで、啓蒙している。	
20	桃山学院大学	ほとんどの方が、薬物に対して否定的な印象を持っているが、一部の者が肯定的（無関心含む）な印象を持っていることは継続して問題意識を持つべきであると考えます。また、新入生ということで大学に入學する前後の意識になるので、地域や高等学校等との連携も必要ではないかと考えます。	各大学の薬物乱用防止に向けた取組の紹介など	本学のシステムを使い、回答を促している。ただ、新入生のため回答する必要があるアンケートや提出物などが多く、回答率の向上が課題である。	本報告書を関係所管や学生支援担当副学長等に共有して、薬物乱用防止の活動に活用してもらっている。	飲酒、タバコに関する質問は非常に大事でぜひ継続して行うべきだが、「薬物に関する意識調査」の設問1・2に来るものではないのでは、という意見が関係所管からあった。 設問の最後などに動かし、などの検討が必要ではないかと考える。

